
キャリーケースの女

瀬戸真朝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャリーケースの女

【NZコード】

NZ85990

【作者名】

瀬戸真朝

【あらすじ】

東京の大学に入学し、夢の一人暮らしを始めたシユンの元に初対面の瑞穂が突然現れ、シユンは半ば無理矢理に瑞穂と同居する羽目に。更にバイト先の先輩や同期の大越、愛するみなこちゃんを交えたコンビニラブコメディー……と思いつきや、後半で瑞穂の知られざる過去が明らかになり　あなたには、帰れる家がありますか？

完結済。反響によつては番外編掲載も。

某大学文芸部部誌掲載作より大幅加筆修正済み。第17回電撃大賞落選作。

電撃大賞にほぼ全編を改稿して投稿しようと思っていますので、そのことを踏まえて感想を頂けると大変嬉しく思います。ちなみに狙いはメディアワークス文庫賞一本です。

1・1（前書き）

とてもハイテンションなコンペティティブゲームナーです。
ですが第七章 瑞穂の物語 から急展開を迎えます。
それまではゆるーい彼らの物語を楽しんで頂けたら幸いです。
全10章で既に完結済みです。

なお、手元にあるWordファイル内ではもちろん文頭を下げているのですが、編集上の都合により文頭下げをしておりません。
申し訳ないのですが、承の上お読みください。

第一章

「よつしゃ、ついに一人暮らしの始まりだーーー！」

実家から送った荷物を昼過ぎから運び入れていたが、やつと片付けも一段落着いた。

布団を敷いて勢いよく倒れ込むと、天井の木目が視界に広がる。

「……ボロいし、こんな音立てると苦情来たりするのかな……ま、一階だし大丈夫だよな。よしつ、今日からこには俺の城だ！」

梅雨明けも近付き、夏も迫った今。

春から始まつた東京での大学生活も多少は落ち着いてきた。今まで毎日一時間半もかけて実家から大学に通つていたが、バイトの給料も貯まって今日から念願の一人暮らし出来ると思うと、どうしても気分が高まつてしまつ。

「もう、わざわざ毎日家に帰つたりしなくていいんだ！」

布団の上で派手に寝返りを打つと、今までの日々を思い返した。

「飲み会やバイトで朝までこちいたりすると、荷物やテキストとか取りにわざわざ家帰つたりして面倒だつたしな。仕送りとバイト代足しても、こんなボロアパートを借りるので精一杯だつたけど……」

二階建て木造アパート一階。

部屋の壁は土壁で出来ていて、床はフローリングではなく畳の和室。私鉄だが特急が止まる比較的大きい駅が近いのと、風呂・トイレ別というのが数少ない利点、といつここの部屋を見回してみる。

「まあでも、友達んちに何度も泊まるのは気が引けたし、やっぱ一人暮らしは楽だしな。それに、せっかく東京の大学に来たんだから、距離なんて気にせずにキャンパスライフを満喫しなきやな！」

おっと、いけない。

一人暮らしをすると独り言が増えるとよく言つが、その通りなのだと気付いた。

これから気を付けないと。

そんな時、玄関のチャイムの音が聞こえた。

一体誰だろう？

片付けに手間取つて、今はもう夜の十一時だ。これ以上荷物が届く予定はないはず。

それに、こここの住所は友達にまだ教えていない。

「はーい、どちら様ですかー？」

一体誰なのか疑問に思いながらも立ち上ると玄関に行き、ドアを開けた。

すると扉の前にいたのは化粧氣もない、美人でもなくパツとしない顔の若い女だった。

髪は茶髪のショートカットで、ボサボサな頭をしている。服はヨレヨレのTシャツに、濃い青のジーパン姿。

俺もこの時期だと、Tシャツの上からチェックの柄シャツを羽織り、水色のジーパンとかと合わせているぐらいだ。

それで髪も染めてない俺は、おしゃれだと言われる人種とは程遠いのは自覚していた。

しかしそんな俺にも、この女の格好がダサいことは分かる。

そして女の背後には革製で小さめの黒いキャリーケースがあり、縫い目の白が黒の革に映えて目立っていた。

どこをどう見回しても全く見覚えがないぞ……。

「あのー、どちら様ですか？」

戸惑いながらも話しかけると、女は何も言わずにキャリーケースを持ち上げて部屋に突如上がり込んで来た。

「ちょ、ちょっと… 勝手に入らないで下さいよ…」

だが女は何食わぬ顔で中に入り、部屋中をゆっくりと見回した。

「……ふーん、男の部屋にしてはきれいな方ね。ワンルームだけど……ま、そこは問題ないか。もうちょっと広ければ良かつたんだけどねえ」

「な、何なんですか、あなたは?！」

勝手に部屋に上がり込まれたらそう聞くのも当たり前だ。

しかし、女はその質問には答えずにキャリーケースを部屋の隅に置き、俺の方を見た。

「あたし、ここに住むから。よろしく」

突然言われたその一言は、俺の頭を混乱させるのに十分過ぎる言葉

だった。

ここに住む？ 誰が？ 一体どうして？

しかしいぐり考へても仕方ないことに気付く、慌てて反論した。

「おいつ、勝手なこと言つなよ！ なんで俺が、知らねえ女と暮ら
さなきやいけねえんだよ」

「長谷川瑞穂」

「…………はあ？」

この状況で名乗られるという不意打ちをされ、つい気が抜けてしま
つた。

「これであたしたちは知り合いでしょ。何か文句ある？」

そう言られて納得しそうになつたが、慌てて突っ込んだ。

「名前知つたからつて知り合いじゃねえよ！ そもそも俺の名前を
知らないじやんか」

あやつへ騙されそだつた俺も俺だが、肝心なこと気付かずやへ氣付

いた。

だが、まるで小さな子供を見るような目で女は見てくる。

「知つてるわよ、中井俊也君。
なかい しゅんや

呼びやすいから『シユン』でいいわよね」

いつの間にか名前が知られている上、更にあだ名まで勝手に決めら
れている状況に益々焦つた。

何だかこのままだと、せつかく手に入れた俺の城が見ず知らずのこ
の女に乗っ取られてしまうような気までしてきたぞ。

「何がシコソだよ！ それに何で俺が、お前なんかと暮らすなきゃいけないかな？」

文句を嘯ねつとするが、女が言葉を遮ってきた。

「『お前』じゃないわよ、『瑞穂さん』って呼びなさい。あたし、これでもシコソの一つ上なんだから！」

「何で俺の歳まで知ってるんだよ？ とこつか、俺の一体何をどうまで知ってるんだ？！」

やつやつて焦つていろと、なだめるかのような口調で女はいつ嘯つた。

「まあ良いじゃない、シコソ。家賃と食費と光熱費は半分払うし。敷金や礼金とかは払わないけどね」

『半分』 その言葉につい、心をときめかされた。

築ウン十年のボロアパートなのに、こゝは一応都内だからって家賃は高めで今のバイトの給料だと正直辛い。

仕送りもあるが、電気代とかを考えたらなかなか切羽詰まっている。でも、だからって今日初めて知り合った奴と一緒に暮らすなんて……それに、一応相手は女の子なんだし……でも家賃……。

頭の中で葛藤していると、突然女が俺の顔を間近から覗き込んできた。

「…………うわあ、何ですかいきなり？！」

慌てて離れるが、女は笑い始めた。

「こやあ、一緒に暮らすって言つただけでいさんな『ビジョン』なん

て、童貞なんだなあと思つて」

「うふ、おーーー。」

「びひしてバレた？！」

大学に入つて、周りの男共がとっくに卒業していると知り、正直た
だでわえ焦つてるの……」

「ははは、まあやう焦らなくしてこーよ。チヨリーボーイ君」

まるで、俺の心を読んだかのよつなその言葉は胸に突き刺さつた。

「べ、別に、今年でもう十九なんだからいつだつて出来るしー。や
れにそんなこと、お前に関係ないだろつ」

慌てながらもそつ言つと、「『お前』じゃなくて、みーずーぼーや
ん！」と釘を刺してきた。

そんな、初対面で名前なんか呼べるかよ……。

「これから暮らしていく相手なんだから、ちやんとお前で呼べるよ
うにしなさいよ、シヨン。それに、あたしがシヨンの童貞を卒業さ
せたつていこー」「

「はあ？！」

同居することがいつの間にか決められて、突然そんなことを言われて更に慌てた。

だがそんな俺を全く気にしていない様子で、さつき敷いた布団をまるで自分の物かのように女はめぐる。

「じゃ、あたし長旅で疲れ切ったからもう寝る。おやすみー」

「ちょっと、それ俺の布団なんですけどー。」

慌てながら布団の横に座ると、女はそんな俺を見て笑った。

「いいじゃない、横で寝ればついでにやつても良いよ。あたしは寝てるけど」

そして女は欠伸をすると、目を開じてしまった。

「ちよつ、起きて下せこってばー。」

掛け布団」と謳つたが起きる気配は少しもなく、女は寝息を立てていた。

「…………こんなのアリかよ…………」

もはや諦めるしかないと悟つた俺は、仕方なくさつき押入れにしまつたはずの予備の布団を運び出し、女とは離れた場所に敷いた。……と言つても、狭いワンルームだから全然離れてなんかいないんだけど。

「『友達が来た時の為に、もう一式持つて行きなさい』って布団持たせてくれた母さん、ありがとう……まさかこんな風に役立つとはな……くつそー、明日ひたすら追い出してやる。」

朝から畠仕事で今頃とっくに寝ているはずの母さんに向かってそう言つと、とにかく目を閉じて寝ようとした。
だが、隣で寝ている存在が気になつて、もう一人の俺が言つことを聞いてくれない。

結局、殆ど寝られずにその夜を過ぎした俺だった……。

翌日。起きてすぐに違和感に気付いて背中を触ると、着ていたTシャツが少し濡れていた。

どうやら寝汗をかいてしまつたらしい。実家でこんなことはなかつたが、この部屋にはクーラーがないから仕方ないのだろう。
ああ、これから暑い夏がやってくるのか。嫌だな……。

寝起き頭でそんなことを考えていると、先に起きていたらしい女が隣の布団から不思議そうな顔で俺を見ていた。

「そんなんじつと見てきて、一体何なんですか？」

「いや、何で襲つて来なかつたのかなあと。てっきり、我慢出来なくて夜中にでも来ると思つてたし」

思つてもいなことを言われ、俺は頭を抱えるしかなかつた。

「……そんなん俺、信用出来ません？　さすがに、好きでもない女人なんて襲いませんって」
「チエリーボーイなのに？」

布団の上を転がりながら笑っている女を見て、俺は髪の毛をかき上げるしかなかつた。

好きな人相手じやなきや何も意味がない、と正直思つ。焦つているのも事実だつたが、経験がないからこそそう考へてしまふ俺は異常なのだろうか。いや、そうではないと信じたい。だから少し躊躇はしたけれど、語氣を強めて言つた。

「……俺、絶対そういうことしませんから!」

女は動きを止めて起き上がると布団の上に座り、立つていた俺をただ黙つて見つめている。

その表情から驚いているように見えたが、何がおかしいのか突如笑い始めた。

「あはははは! ジャあシュンがいつまでチョリーボーイでいられるか、楽しみにしどくわ」

そつ言ひで口角を上げた女の笑みが、何故だか印象的に思えた。

その後、俺が作った朝食を囲みながら出て行くようじ遠回しに言つてみたものの、全然効かなかつた。

それに書はなさうだし家賃も助かるからと、結局のところ滞在を許してしまつてゐる。

だからつて長期でもいいかは別だけど。

……なんかもう、この状況を受け入れるしかないと思えた俺は、昨日と比べてちよつと成長したのかも知れない。

はあ……結局、一人暮らしを一日も体験出来なかつたんだなあ……
俺

第一章

夜になつて、あの女……瑞穂さん（と、呼ばないとまた怒り出す）をアパートに置き、いつものように下り電車に揺られていた。ガラスを挟んだ窓の外には、既に見慣れた観覧車が見える。大学から少し先の高台にある玉那ランドたまなという小さな遊園地のもので、電飾の模様を何通りも変えながらこちらに近付いてきた。

やがて、大学の最寄駅に着くアナウンスが鳴る。

『中成大学・明王大学駅』の駅周辺は山に囲まれ、遊園地の他にも玉那丘陵の自然を残して作られた大きな動物園もある地域だつた。初めてうちの大学を見た時、『こんなところが東京だなんて詐欺だろー!』と心の中で叫んだのをよく覚えている。

大きなお店があつた方が便利だと母さんに言われ、同じ市内だつたが大学から少し離れた玉那駅近くにアパートを借りたのもそのせいだつた。

明王大側である西口を出るとすぐ見えるのは、濃い緑色の看板が目印のコンビニ、『BUN BUN 中成大学・明王大学駅前店』だった。

大学近くのここがバイト先で、俺は夜勤をしている。

「おはようございます！」

バイト開始十五分前に?バックルーム?と呼ばれる従業員が集まる部屋に入つて挨拶をすると、一歳年上の佐藤生人さとうじゆと先輩が先にいた。

「ああ。おはよう」

佐藤先輩は全国でもレベルが高くて名が知られている中成大に通つていて、週に一回は一人で組んでいた。

寡黙だが、仕事はいつも完璧にこなす先輩だ。

……一方で俺なんて、周りから記念受験と揶揄された中成大に案の定落ち、滑り止めだつた明王大なんかに通つているし、春から始めたこのバイトでも失敗ばかりだ。

だから、いつも冷静で頼りに出来る佐藤先輩に憧れていた。

先にユニフォームに着替えると言つて先輩が更衣室代わりのロッカールームに入ると、奥からピンクのスカートをなびかせて向かってくる女の子が見えた。

サイドに結ばれたツインテールと形も程良い胸を揺らしながら、俺の前で止まる。

「俊也くん、おはよ。朝まで大変だけど、今日も頑張つてね」「もちろんだよ、みなこちゃん！　今日も頑張るよ！」

ただでさえかわいいのに、まるで本当の天使かと思えるような笑顔。そして男では決して出ない甘く可愛らしい声で『頑張つてね』なんて言われたら、たとえ夜勤がどんなにきつても男だつたら笑つて返すしかない。

彼女は都内でも有名な名門女子大に通う田代美奈子ちゃんたじろみなこで、うちのコンビニのオーナー夫婦にとつてたつた一人の愛娘だ。

実は一つ上だけどそれを感じさせない程の可憐さで、今日も彼女から田代が離せなかつた。

「おにぎり作つてきたから食べてね」

テーブルの上の皿には海苔が付いたおむすびが並んでいた。たまにこちやんが料理を作ってくれるくらい、みなこちやんは優しい女の子だった。

「こつもありがといへーみなこちやんのおこせり、おいしくって大好きだよ」

「おー、中井。始めるわ。わたりと着替わる」

いつの間にか着替え終わっていたらしく、佐藤先輩は縁のコニーフォーム姿で立っていた。

「うわあ先輩すみません、すぐ着替えます！『めんね、みなこちやん』

本当はみなこちやんともっと話していたかったが、さすがに佐藤先輩には逆らえない。

「頑張つてねえ～後でおこせり食べてね」

笑顔でそう言われ、つい一瞬顔がにやけてしまったのは秘密だ。こんなにかわいくて優しいいい子はなかなかいない、と断言出来る。学部の大半が男で出会いがない俺にとって、みなこちやんの存在は心のオアシスだった。

たとえ、こんな俺には高嶺の花だと笑われても！

「ああ～、みなこちやん～」

みなこちやんの笑顔を思い出し、ロッカールームで着替えながらもう呟いた俺だった。

そんなみなこちゃんと比べて……瑞穂さんは何でこんなにひどいのだろう！

うちに押しかけて来て既に一ヶ月が過ぎたが……正直、瑞穂さんの性別を疑う出来事があり過ぎる。

最初、（『家賃の半分は払うからルームメイトよ』と怒るが）居候なのだから料理ぐらいは作つてもらおうと思ったが、出でた物は黒ずくめの料理たちで言葉を失つた。

せめてラーメンぐらいは作れるかと思つたら、お湯が沸騰する前に麺を入れるという暴挙で、伸びまくつてこるラーメンを食べる羽田になつた。

お腹を壊したくないし何よりもおいしく食べたいので、結局のところ俺が全て作つていて。

それに片付けもすぐしなくて物を散らかすし、食べかすもよく落とすから掃除も大変だ。

更に瑞穂さんは無類の酒好きで、部屋には日本酒の瓶が日に日に増えていった。

「シユンー！ あんたも飲みなさいよ」

未成年だつて言つてゐのにも関わらず、たまに俺にまで飲ませてくれる。

どうやら俺は強いらしく倒れこむほどは酔わない一方、瑞穂さんは酔い出すと所構わずにひびき寝るから大変だったりする。

全然言つこと聞いてくれないし……。

「瑞穂さん、布団で寝て下さい…」
「やだあーここで寝るもんー」

部屋のど真ん中で転がる瑞穂さんの腕を引っ張り、布団の上まで運ぶことも多々あるからやれやれだ。

それに一ヶ月が経つて生活費を半分に割った額を請求したら、
「確かに『家賃と食費と光熱費は半分払う』とは言つたけれど、光
熱費に水道代は入らないわ。悔しかつたら辞書を引いてみる事ね」
なんて言われ……それを知つた時のショックと言つたら…！
辞書の前で倒れ込んだ俺がいる……。

「いくら水使つてもタダつていいわね～」と言つて、瑞穂さんは今
もお風呂に浸かっていた。

く、悔しい……！

しかもこの前、家を出るタイミングが重なつて一緒に最寄りの玉那
駅まで歩くと、そのまま同じ電車に瑞穂さんも乗ってきた。

「そりいえば、瑞穂さんはどこの駅で降りるんですか？」
「え、こじだけど？」

丁度ドアが開いて瑞穂さんは歩き始めたが、駅名を確認して慌てて
俺も降りた。

そこはあの、中成大学・明王大学駅で、瑞穂さんは東口 中成大
学の方に向かうから驚いた。

だって、あの瑞穂さんが佐藤先輩と同じ中成大だなんて！
悔しい……悔しそうである。

そんな瑞穂さんもどつかの本屋でバイトをしていて、アパートを空
けることもたまにあった。

だけどお互に暇になると、紙を切つて作つたオセロをして勝敗を競つた。

俺ばかり勝つていると瑞穂さんが悔しがつて酒を飲み始めるから、結果的に困るのは俺なんだけど……。

瑞穂さんはいつだって本氣で、いつだって向きになる。とても子供っぽい人だった。

それ以外にも、ひたすらトランプで（東京出身らしい瑞穂さんは？大貧民？が標準語だと譲らないが）大富豪をしたり、天気が良かつたりすると外に散歩しに行つたりした。

どれも一人ではなかなかしくいことで、そういう時に瑞穂さんが横にいると楽しいのも確かだつた。

それに実家では姉貴と一緒に家事を手伝つのが当たり前だし、結局のところ瑞穂さんの存在はそれほど重荷でもなかつた。

生活費（水道代を除く）も半分だし！

そして夏休みも近付きテストも刻一刻と迫っていたが、夜勤の人数が少ないのであってバイトは休めなかつた。

中成大学・明王大学駅に着いて電車から降りた途端、熱風が顔に当たる。大学や俺のアパートがある玉那市は盆地で、寒さはもちろんで暑さも半端なかつた。

実家は一応関東圏だが、こんなに蒸し暑いなんてことは殆どなく、早速夏バテ気味だ。

だがそんな日でも店内は涼しいのが、コンビニバイトの数少ない利点の一つだつた。

今日は明王大で学部も一緒に大越健太おおこしけんたと組む日で、大越との日はいつもギリギリにコンビニブンブンに着いた。

「よつ、大越。今日も暑いなあ」

「おはようございます、中井くん。今日も遅いですね」

「ははは、なんでだろうなー」

惚けたふりをすると、分かつてゐるのか半分呆れていらうだつた。

「はいはい、ちゃんと仕事はして下さいね」

適当に返事をして、ユニフォームに着替えよつとロッカールームに入つた。

それにもしても、同じ年なのに大越は何故か妙に敬語を使つてくるから変な奴だ。

そして二十一時を過ぎて夕勤の子と代わり、大越と店内に出た。

この時間だと大抵人影は殆どなかつたが、ふとアイスクリームケースの前でここにいるはずのない後ろ姿を見付けてしまつた。ショートカットでボサボサの頭に、何よりさつき見た覚えがある赤いTシャツに濃い青のジーパン姿。

「……みーすーほーさん!」

予想通り、表に『家がない』と書かれているTシャツを着た瑞穂さんが振り返つた。

半分冗談とも言えない文章がプリントされたその赤いTシャツについては、既に夕飯の際に突つ込んだのでここではもう触れないでおく。

「ん? どうしたの?」

「どうしたのじゃありません! なんでそんな格好でうちの店にいるんですか!」

「ここ、あたしの大学からも最寄りのコンビニだし、客なんだからどこにいたって問題ないでしょー!」

店で会うのは初めてだつたが、瑞穂さんは悪びれもない様子だつた。……しかしよくよく考えてみると、このTシャツを着て玉那駅から電車に乗つてここまで来た瑞穂さんつて……呆れて何も言えないとはこのことだらうか。

「まあなんですが……少なくとも、その格好と一緒に電車は乗りたくないですね……あれ、でもなんでこんな時間に? さつきまでうちで珍しくテスト勉強やつてたじやないですか」

「こんな暑い日にそんなのやつてられる訳ないじゃない。あ、それよりアイス買ってよーあたしモンスターcupのバニラが好きー」

アイスケースを勝手に開けると、全国共通の緑のユニフォームを着た俺の方に青いパッケージで包まれたアイスを差し出してきた。

「俺は夾の方が好きですし、密つて言つなら自分で買つて下さいよ！」

アイスを受け取らずにそんなやり取りをしていると、大越が何やら不思議そうな顔をして近付いてきた。
先にレジにいた大越は、俺と同じ緑のユニフォーム姿だった。

「どうしたんですか、中井くん」

大越がそう話しかけると、瑞穂さんは大越の方を向いた。丁度今日の夕飯の際、同じ学部の友達がバイト先にいることが話題に上がっていた。

「あ、初めましてー、シユンの飼い主兼ルームメイトの長谷川瑞穂って言います」

「飼い主ってなんですか！ 面倒を見ているのは俺の方でしょうー。」

誰もいない店内だから良かつたが、こんな漫才みたいなやり取りを大越も面白そうに見ていた。

大学でも仲が良い大越には、非常識で面倒見のも大変な居候のことの一応話してあつた。

「ははっ、あなたが瑞穂さんですか。お話は中井くんの方から聞いています。それにしても、面白いTシャツですね」

「うん、だからアイス奢つてー」

文脈を相当無視したやり取りだったが、大越は意表を突かれたよう

に再び笑つた。

そして「いいですよ」と言つてレジにアイスを持って行き、ポケットから財布を取り出していた。

瑞穂さんも「わーい！」と言いながらそれに付いていき、今やレジを隔てて二人は向き合っている。

一瞬呆気に取られたが、慌てて俺もレジに向かつた。

それ以来、大越と組む日に瑞穂さんが急に来たり、俺のアパートに大越が時々遊びに来るようになつた。

バイト前に三人でゲームとかで遊んだり、鍋を囲んだりした。

「なんで鍋なんだよ！… もう八月も近いのに…」

大越がどこからか買つて来た、季節外れで高いくせにおいしくない白菜を俺は箸で突いていた。

「だつて大勢で鍋つて楽しいじゃないー」

「そりですよ、面白くていいじゃないですか」

瑞穂さんと大越は笑つている。

だが、ただでさえクーラーもなくて暑い中、鍋をやると言つ瑞穂さんが信じられなかつた。

瑞穂さんはそんな突拍子もないことを言つのが得意だつたが、どうやら大越はそれがいいらしい。

勝手なことばかり言つ瑞穂さんを大越は楽しんでいた。

「ねえ、あたしとシユンと大越くんでバンド組もうよ」

その日も、瑞穂さんは取り皿に豆腐を取りながら急にそんなことを言い出した。

豆腐からは湯気が立ち上つてゐる。冬ならともかく、夏の今は見ているだけで暑苦しい。

その思いを我慢しつつ、俺は驚きながら聞き返した。

「えり、瑞穂さん、楽器出来るんですか？」

「馬鹿ね、シコソ。出来ないに決まってるじゃない」

案の定そう答えたが、瑞穂さんは気にせずに続けた。

「でね、バンド名は？世界のどこでやっているの？」

「あはははは、いこですねそれ！」

大越は笑っているが、じつやうの様子から贅同はしてこない。

「でしょー？ シコソと違つて、やっぱ大越くんは話が分かる子ね」「思い付きをただそのまま言つてるだけでしょー！」

もはや呆れている俺と対称的に、瑞穂さんに對し感心している大越がただのアホにしか思えないのは氣のせいだろうか。だがそんな架空妄想バンド話は盛り上がり、ピアノが得意なみなこちゃんをキーボードに加えるとなると、まさかの俺までテンションが上がつてしまつた。

「みんなじゃんがいるなら何だつてやるゼーベーギターも何も弾けないけど」

「中井くんはほんと、みんなじゃんのことが好きですね」

「だつてみんなじゃん、かわいすぎるだのー。」

瑞穂さんも最初の頃は「『みんなじゃん』って誰？」と訊っていた。だが、俺と大越で盛り上がりしていると段々とどんな女の子なのか分かつってきたようだった。

そうやってアホな話ばかりして、三人での日々は過ぎていった。

第二章

「シユンー！　いい加減起きてー！」

テストも補講期間も終わり夏休みを満喫し始めてきた頃、朝から突然瑞穂さんに叩き起こされた。

「なんですか……まだ九時過ぎじゃないですか……」

「いーの！　それより、早く海行こー」

「あー、海…………はあ？　海！？」

言われた言葉の意味を段々と理解し、俺は飛び起きた。
瑞穂さんは何やらビニールバックを既に抱えている。
中にはタオルの他に、この時のために買ったのかレジャーシートや浮き輪などが透けて見えていた。

カーテンが開いた窓からは青々とした山並の他に、雲一つない青空に太陽が朝から本気を出して輝いているのが見える。

そういえば一昨日はバイトがなく、夕飯後に何気なくテレビを一人で見ていた。

「明後日は全国的にこの夏一番の快晴」という天気予報を見て、「海行きたい」と瑞穂さんが言っていたのを段々と思い出していく。いつもは付き合ってくれる大越が今日はバイトで、行けるのは俺だけだった。

それで、行つてもいいと俺も言つた氣はするが、決定事項ではなかつたはずだ。

「もう準備出来たよー早く行こー」

昨日はバイトでもちろん夜勤明けだったが、ここまで準備をされたら、もう行かないとはさすがに言えなかつた。

「……はいはい、行きますからちょっと待って下さこよ
「やつたー！」

叫んでいる瑞穂さんをよそに慌てて布団を片付ける。高校の授業で使っていた海パンはどこにしまつたつけ、などと考えつつ突如海へと出発することにした。

電車を何本か乗り換えて途中で県境を越えたりしたが、瑞穂さんが行き方を知っていて迷うことはなかつた。

家を出て一時間半後に辿り着いた海岸は思つていた以上の人出だつたが、海というものは意外に近かつた。

……いや単なる？海？とやらだつたら、一応東京にもある。だが、「あの汚い東京湾で泳ぐのはさすがに無理」と瑞穂さんが言うので、わざわざ都外にまで来たのだった。

……ん？　泳ぐ？

海岸に着くとレジャーシートを敷いてビニールバックを置き、珍しくワンピース姿である瑞穂さんは早速ボタンを外し始めた。

「瑞穂さん、あの」

声をかけると、瑞穂さんは「ん、何？」と言つたまま手を止めなかつた。

「あのですね、その……」
「何よ、早く言いなさい」

瑞穂さんはまつつきしない俺を睨み付けてきた。 もういいじゃない。

「…………俺、泳げません」

一瞬の間。あまりにいつこう機会がなく、自分でもすっかり忘れていたことだった。そんな俺に対し、瑞穂さんは動かしていた手を止め、深刻そうな顔つきをした。

「「めん、聞かなかつたんだけど……もしかして」

「…………はい」

夏真つ盛りである以上、海岸はカップルや家族連れの声で騒がしい。そんな中、瑞穂さんと俺がただ黙つて見つめ合つている姿は周囲から明らかに浮いていた。だが。

「「じめーん、シユン、一応男の子だからまさかと思つてつい！ 今日、アレだつたんなら言つてくれて良かつたじゃない」

あまりに見当違いなその言葉に、さすがの俺も何のことか察するまでしばらフリーズした。

「…………違います、かなづちなんです！ 第一、なんでそれなんですか！」

やつと現実に戻つてきてそう反論すると、やつきの深刻そうな顔が嘘かのように瑞穂さんは派手に笑つた。

そして再びボタンを外す手を動かし、やがて露出している部分は少なかつたが赤色のビキニ姿になつた。

「あめまめ、だつたら浮き輪にしがみついてればいいじゃない。
ほり、もつ置いていくよー」

瑞穂さんは浮き輪を持つて走り出して行く。俺はまだ服のままだ。

「瑞穂やーん、待つてくださいってばー！」

浮き輪の有無は今の俺にとって死活問題だ。

Tシャツを急いで脱ぎ半ズボンも下ろして海パン一枚になると、慌てて瑞穂さんを追った。

「あー、やつぱり夏と言つたら海よねー

「はいそーですね……あー怖えー」

波打ち際より少し離れたところにいたが、浮き輪の中にいる瑞穂さんは海を満喫していくようだった。

一方、もちろん瑞穂さんが浮き輪を譲ってくれる訳がなく腕だけ輪の中に入れて、より沖の方へ引っ張る役目を俺は負わされている。深い緑色をした水の中にいると、足元どころか水に浸かっている部分の殆どが見えなかつた。

それがまた恐怖を倍増させる。

「まだ足着いてるんだから大丈夫でしょー」

「それでも怖いんですつてばー！」

瑞穂さんは気楽そうだが小さい頃から泳げない俺にとって、考えてみると海なんて最後いつ来たか分からないぐらいだ。

「もつと遠くー！　あんたあたしより身長高いんだから行けるっしょー」

瑞穂さんと俺は大体二十センチぐらいの差だったが、彼女よりも少しでも瑞穂さんの足が着かないところまで行かないと満足しないらしい。

「はあー、分かりました！」

よう沖の方を目標として、俺は再び歩き出した。

「わー、足着かないー深ーい！」

瑞穂さんは相変わらずのはしゃぎ様だった。

俺はまだ足が着いたが、肩から下は海水に浸かっていた。
ここまで来ると浅瀬より人も少なくなつてくるが、こんな沖に来た
のなんて初めてだ。

「シユン、えいっ」

突然、瑞穂さんは浮き輪からみ出た手で水をかけてきた。
水しぶきはそのまま俺の顔に当たる。

「うわっ、何するんですか！」

「あはは

瑞穂さんは笑つたまま再び両手を動かし、俺の方に海水をかけてく
る。

しまいには浮いて漂つていたワカメまで手に取ってきた。

「あははじゃありませんから、もうー、お返しですー！」

頭にワカメを乗せられたのを境についに反撃すると、瑞穂さんは更
に投げてきた。

そんな投げ合いがしばらく続く。いつの間にか我も忘れていたが、
こんなにはしゃいだのはじつ以来だらつと遠くの浜辺を見ながらふ
と考えていた。
その時だった。

「あ、波大きい！」

「えつ」

回想していた俺にとつて不意打ちで、勢いのあまり浮き輪からつい腕を離してしまった。

ふわっと浮く感覚。頭上まで海水が占める。目が開けない。息が出来ない。そして下の方に引っ張られていぐ。もう限界……

その時、強い力が片腕にかかるのを感じた。

「ひっ、はあはあはあ」

頭の上にはまぶしい太陽の光と、雲一つない青い空が広がっていた。やつとの思いで呼吸をする。瑞穂さんは浮き輪を脱いでそれを片腕に掴んだまま、もう一方の腕で俺を引っ張りあげたようだった。

「よかつた、間に合つた。もう、気を付けなさいよ」

そう言われたが、余裕がなくて反応出来なかつた。

一方で瑞穂さんは再び浮き輪の中に入つたが、そのまま俺の腕を離さないでいた。

今は珍しく、俺が瑞穂さんに頼りきつてゐる。
そのまましばらく無言が続いた。

ふと瑞穂さんを見ると、さつきまでの笑顔と異なり顔色が曇つていた。

「……無理矢理連れて来てごめん」

俺の腕を掴んだまま、突然謝ってきたから驚いた。瑞穂さんはすつ

と下を向いていた。

「何、柄にもなく謝つてるんですか！　もう大丈夫ですかー！　それに、俺も楽しいですよ」

「……そつ。なら、良かったー！」

今まで沈んでいたが、瑞穂さんは再び笑い出していた。
確かに溺れそうにはなつたが、実際俺も楽しかった。
まさかこんなに海で楽しめるなんて思つていなかつた。

夕方近くになり、帰宅の途に就くために駅へ向かつた。

二人で他愛も無い話をしつつ、俺の少し前を瑞穂さんは歩いていた。
やがて、海にちなんで竜宮城に模して作られているのが有名らしい
駅の前に着くと、駅を背にして瑞穂さんは突如こちらに振り返つた。

「また、来年來よつねー！」

その言葉に自然と頷けた。

そんな俺を見て、瑞穂さんも「えへへー」と笑つた。

その顔はまるで安心しきつているかのような満面の笑みで、俺も笑
顔でつい返していく。

電車に乗り、やがて窓からあの観覧車が近くに見えてきた。日帰りとはいえ遠出していたのもあつてか、無事に帰ってきたという安心感を観覧車を見て感じた。

そして玉那駅で降りると、珍しく外食をして帰ってきた。店を出る際、更に珍しいことに瑞穂さんが全額出したので驚いた。だが、それで終わりではなかつた。

「あれ、何ですかこれ？」

帰つて来て早速濡れた水着を洗濯機に入れると、喉の渴きを感じて冷蔵庫を開けた。

するといつも入っている野菜類の他に、小さめの白い箱が置かれていた。

「あ、忘れてた！ それ、開けてみて」

瑞穂さんがそう言つので冷蔵庫から取り出し、何なのかと思いながら開けた。

見るとそこには、ショートケーキやチョコレートケーキ、チーズケーキにモンブランが入っていた。

「あれ、これって……」

「シヨン全然気付かないんだもん。はい、ハッピーバースデー！」

そう言われ俺は呆然としたが、ふと今日が八月三日であることを思

い出した。

「知つててくれたんですか？！」

夏休みの真ん中にあるせいで、小学生の頃から誕生日を忘れられがちだった。

だから祝われないことに慣れていたし、自分でも忘れているほどだつた。

なのに、まさか瑞穂さんが知つているとは思わず、驚きを隠せなかつた。

「シュン、ケーキ何が好きか分からなくていっぱい買つたし、好きな選んでいいよー」

そう言われ、段々と察しがついてきた。いつも突拍子のないことを言つ瑞穂さんについ慣れていたが、考えてみれば急に海なんておかしい話だ。

俺に楽しんで欲しくて、瑞穂さんなりに今日のことを計画したのだろひ。

「ショートケーキおいしい？」

ケーキを一人で突付いていると、瑞穂さんにそう聞かれた。

「おいしいですよ。それに、今日も楽しかったですよ」

そう返すと、瑞穂さんはフォークを持ちながら満面の笑みを浮かべ、俺の方を見た。

「シュンも楽しかったなら良かつたーー！」

それから瑞穂さんは熱心にチーズケーキを食べていたが、突如「あつー！」と声を放った途端に深刻そうな顔つきをした。それを見て、俺も焦った。

「どうしたんですか？…」

不安になつてしまふと、瑞穂さんは涙目になつながらもつぶくと俺の方を向いた。

「ケーキ……写真撮るの忘れたあ……」

思つてもいない言葉で俺は一瞬呆れながらも、慌てて気を取り直した。

「またクリスマスの時に食べるんですから、その時撮ればいいじゃないですか」

元気付けようと思いつつ、瑞穂さんは少し驚いたように俺を見た。

よく見ると少しだけ涙が出てこるように見えたが、何でもないかのように瑞穂さんは振舞つていた。

「そう、よね……クリスマスがあるもんね。よしつ、食べよつー、うん、おいでー」

少し気になりはしたが、瑞穂さんは携帯を構えることもなく再び食べることに専念していた。
いつもの瑞穂さんだった。

「この時、？クリスマス？という言葉が自分から出て来るぐらい、冬になつても瑞穂さんが家にいるものだと、『よく自然に思つていた。』それぐらい瑞穂さんの存在は俺にとって普通と化していた。だから、その言葉が一体どういつ意味を持つかなど全然考えていないかった。

第四章

「シュー、なんか野菜がいっぱい届いたよー」

午前中からいきなり玄関のチャイムに起されたが、瑞穂さんが出てくれたらしく。

「あー……ありがと」「わざこます」

バイト明けで俺は寝惚けながらもそう答える。

瑞穂さんが興味津々に段ボールの中の野菜を見ているのを布団の上で眺めていると、タイミングを計ったかのように俺の携帯が鳴った。

「野菜ありがと……あーもへ、ほほほ、お盆には帰るつてば。じゃあ、また連絡するよ、母さん」

電話を切ると、俺は少し溜息を吐いた。

最近、母さんが実家に帰つて来いといふやつ。

この野菜もそれらの攻撃の一種だらう。

もうすぐお盆だからだらうけど。

実家はここから一時間もかかりずに着く距離にあつたが、うちは代々農家の家系だった。

今は兼業で、大学を卒業したら地元に帰つて来て公務員になれと言われている。

まあ、たとえ経済学部に通つていても今の俺の成績じゃ無謀な話だけど。

将来のこと考えると言わても、俺にはペソヒント来ないんだよな。

それより今は、いつやつて「ンンヒー」でバイトしながら（田舎だけど一応）東京で自由気ままに暮らしてるのが一番気楽だ。

だから、実家に帰りたいとかあまり考えなかった。

……多分、身近につるひとがそばにいるから、寂しいとかあんま感じないのもあるだろ？

「シコーン、実家帰るの？」

瑞穂さんがこちらを見ながらそんなことを聞いてきた。
心なしか、瑞穂さんが少し寂しそうな表情をしているような感じがある。

「んー、やっぱぐむ盆なので少しほは帰らないとまずこみたいですね……あー、めんどくせー」

瑞穂さんは「そつか」とだけ言つと、野菜を冷蔵庫にしまって始めた。

「俺が向いに行つてる間、瑞穂さんの飯とかどうすればいいですかね？ 瑞穂さんの料理は食べられるよ的なもんじゃないです…」

…

小さじ頃からあまり食べなかつた影響か、インスタント食品や冷凍食品といったものあまり買い置きしなかつた。

それもあって普段からいつも俺が食事を作つてゐる分、俺がいない間の瑞穂さんの食生活がどうしても気になつた。

何せ、ラーメンさえもまともに作れない人だ。

「馬鹿にしないでよ、コンビニがあるんだから適当に食べるわよ！」

瑞穂さんは手を止めて言い返してきたが、自分で作ると言い張らな
いあたり本人も分かっている。

初っ端で披露してもらつた黒ずくめの料理たちの味は瑞穂さんもよ
く知つていた。

瑞穂さんに悪いと思つて俺は完食したが、その後一日中寝込むぐら
いの代物だ。
一体、俺の家に来るまで瑞穂さんはどうやって暮らしていたのだろ
う。

そんなことを考へて、瑞穂さんの実家の話つて聞いた事
がないなどふと思つた。

大富豪の際にチラッと東京出身だと言つていたが、それ以上のことは
聞いていない。

ま、いつか。別に知つて何か変わる訳でもないし。
それにしても、実家いつ帰ろうかなあー。

そうやつて珍しく早い時間から起きて考えたりしていふと、再び玄
関のチャイムが鳴つた。

「また野菜かな？」

「いや、それはさすがになくなっていますか？」

俺はそう言つたつもりだったが、「野菜なら今度は大根がいいなあ
ー」と勝手な事を言いながら瑞穂さんは玄関に向かつた。

少しして、瑞穂さんが部屋に戻ってきたかと思えば、俺がよく着るような緑の柄シャツに黒のTシャツ姿の大越を後ろに付けてきた。

「大越くんが来たよー」

俺の前だけならともかく、ダボダボのTシャツに水色で縞々模様の半ズボンという部屋着の格好で大越を迎えるのはどうかと思つたが、瑞穂さんは気にしていないようだつた。
少しは恥ずかしいとか感じないのか……？

「大根じゃなくてごめんなさい、ただの大越です」

入つて来た大越はにこやかな笑顔で俺に向かつて謝つてきた。
「大根？と？大越？をかけているつもりなのか分からんが、少しウザいと思つてしまつたのは気のせいだらうか。

「なんだよ、朝っぱらから。俺が夜勤明けだつて知つてるだろ」「いや、起きるまで瑞穂さんと待つていたようthoughtっていたのですが、起きていって良かつたです」

そう言いながら、いつも使つてゐる四角い形をした机の前に大越が座つたので、俺も布団から出てしぶしぶ向き合つて座る。
だが、なかなか用件を話さないのが更に苛々した。

一方で、瑞穂さんはお茶の用意をしようと台所に立つてゐた。
ラーメンが作れない瑞穂さんでも、紅茶を入れるのは何故だか得意だつた。

「で、何だよ。用件は？」

「実は折り入つて中井くんに相談があるんです」

丁度その頃になつて、瑞穂さんは紅茶が入つたカップを一つ持つてきた。

だが、両手に持つてゐるが、カップが熱いらしく何だが見ている方が危なつかしい状態だ。

慌てて二つのカップを俺が受け取つた。

「え、あたしいちゃまざい？」

瑞穂さんが聞くと、大越は否定した。

「いや、むしろ瑞穂さんがいてくれた方が嬉しいです」

それを聞いて瑞穂さんは嬉しそうに自分のカップと砂糖を持つてくると、俺と大越の間に座つた。

瑞穂さんの紅茶には既に牛乳がカップの半分以上入つてゐる。

ストレートじや飲めないと瑞穂さんは言つて、いつも牛乳をたっぷり入れたミルクティーにしていた。

「実はですね、お盆のシフトの件なんですが、僕の代わりに入つてくれませんか？」

「はあ？ 僕だって実家帰つたりするぞ」

俺らの話を聞きながら、瑞穂さんはミルクティーに砂糖をまず一杯入れた。

「店長がお盆の期間中、時給五十円アップつて言つてますよ

「んーー、それはおいしいけど、でもなあ……やっぱ実家から電話あつたばっかだし」

瑞穂さんは笑顔で砂糖の一一杯目を入れた。ついでに二杯目。今日は更に四杯。

やつと瑞穂さんは満足したらしく、スプーンでミルクティーをかき混ぜていた。

大越は驚いた顔で瑞穂さんを見ていたが、俺はこの光景に既に慣れていった。

そんな瑞穂さんを気にしつつ、大越は俺の方を見て頭を下してきた。

「そこ」を何とか！ 僕も実家から帰つて来いつて言われていてですね……これ、後で瑞穂さんと一緒に食べてください

そつ言つて、大越が差し出したのは羊羹らしき包みだった。

「あーー！『とうらや』の羊羹だーー！」

瑞穂さんは早速それを持って、台所に向かつた。だが瑞穂さんが上手く包丁を使うとは思えない。俺も慌ててその後を追おうと立ち上がった。

「決まりですね」

まだ決まってないと言おうとしたが、「うわあー！」といづ声が聞こえてそれどころじやなかつた。

結局、俺は大越をスルーして台所に向かつた。

「どうして切れないのに金所行つたんですかー。」

俺が怒ると、瑞穂さんは「だって……」と呟いた。

「だつて、羊羹好きなんだもん。とらやの羊羹なんてなかなか食べられないし、つー」

「それで怪我したらどうするんですか、もう一ー。」

ふて腐れている瑞穂さんをよそに、実際俺は少し怒っていた。
無傷で済んだからともかく、もし怪我なんてしていたら……。

「いやあ、中井くんつて思つていたより過保護なんですね」

馬鹿にしたよついにやにやと笑つ大越に「うぬせー」としか言えなかつた。

といふか、手土産に瑞穂さんの大好物らしい羊羹を持ってくるとか、
こいつもしかして計つていたんじゃないかな……？

「でも本当、中井くんが引き受けてくれて助かりました、ありがとうございます」

悔しかつたが、考えてみれば実家に帰らなくていい理由が出来たから案外いいことなのかもしない。

田帰りでもいいから、一口ぐらこは帰る」とこするとしてても。

「あ、それと実はもう一つあります」

大越はそう言いつと、持っていた鞄からチラシらしき紙を取り出すと瑞穂さんに渡した。

「それ、今朝の新聞に入つていまして
「大越、お前、新聞取つてるのか？」

自宅生ならともかく、一人暮らしで新聞を取つてているというのは俺の周りではあまり聞かない話だ。まあ、佐藤先輩とかなら取つていいしだけど、大越が取つてているのは意外だつた。

「何言つてるんですか中井くん、経済学部なんですから当たり前ですよ。ちなみに僕は主な新聞三紙の他に、英字新聞も読んでいます」

耳が痛い。それにしても、新聞四誌取つてるなんて月額でも馬鹿にならない額だ。

し、信じられねえ……どんだけ金持ちなんだよお前……。

一方で瑞穂さんの方を見ると、さつきまで無心に羊羹を頬張つていたはずが、今では大越から渡されたチラシに釘付けだつた。俺も横から覗き込んでみる。

「えーと……『玉那ランド 夏の花火大会』……？」

それは、電車の窓からよく見えるあの観覧車がシンボルである遊園地の花火大会のお知らせだつた。

「毎年やつているみたいなんですが、年末での遊園地が閉園するみたいなんですよ。これで最後ですし、もし良かつたら今度の日曜日に行きませんか？」

確かにチラシをよく見ると、『花火大会は今年最後』と大きく書か

れていた。

玉那ランドは小さい遊園地で、どちらかと言つてメリーゴーランドのような子供向けの乗り物が多くて絶叫系好きの俺みたいな大人にとって物足りない所だと聞いていた。

だから行く気はなかつたのだが、もう一度と行く機会がないかもしれないと考えると、一回くらいは行つといてもいい気がしてきた。

「瑞穂さんはどうします？ そういうえば今年まだ花火見てませんもんね」

横から俺がそう聞いたが、瑞穂さんはチラシから田を離さなかつた。不安に思つて瑞穂さんの顔を覗き込もうとすると、大越が言葉で遮つてきた。

「いや、中井くんは来なくていいですよ」

「うるせー。バイト休みなんだから行くに決まつてるだろ」

「来なくていいですってば」

そんなやり取りを何度もしていると、瑞穂さんがチラシから顔を上げた。

「行く」

こうして、八月の終わりにある花火大会に三人で行くこととなつた。

*

*

*

花火大会当日は無事に晴れた。

どうせだから昼間から玉那ランドに行こうと大越は誘つてきたが、瑞穂さんは嫌がつた。

「別に花火大会だけでいいじゃない。あそこつまんないし」「瑞穂さん、行つたことあるんですか？」

朝食の際にそう聞いたが、瑞穂さんは何も答えないままだつた。そして結局、夕方から大越と待ち合わせることになった。

夕闇が残る中、バスが出ている中成大学・明王大学駅の東口で大越と待ち合わせた。

「お待ちしていました」
「おう。行こうぜ」

普段は中成大生ばかりだったが、駅前の人通りが普段よりも多く、家族連れが特に目だつた。

そのことから、花火大会目的の人が多いと感じさせる。

「なあ、なんで閉園するんだ？」

玉那ランド行きのバスの中も人が多く、俺たち三人は立つたまま乗つっていた。

瑞穂さんは珍しく会話に参加せず、下を向いている。
そんな中で俺が大越に聞いたのだつた。

「確か、家電だつたかな？ 母体の会社が赤字経営で、リストラとか経営縮小の嵐なんですよ。何せ、この不況ですからね」「なんでお前が知ってるんだよ？」

土地勘があるならともかく、ここが地元ではないはずの大越がそんなスラスラ言えることが不思議だつた。

「経済学部ですからそのぐらい知つてますよ」

大越は涼しい顔で言つた。

俺も経済学部で同期のはずなのだが、最近大越が遠く感じるのは気のせいなのだろうか。

まあ、俺が子供なだけなのかもしれないが。

一方で、大越にとつてはせっかく稼ぎになりそうな場面だつたのだが、そんな俺と大越のやり取りも瑞穂さんは上の空で聞いていたかつたらしい。

瑞穂さんはずっと下を向いて何かを考えている様子だつた。こんなことは珍しい気がする。

やがて、玉那ランドに着くとバスから人がゅつくりと降り始めた。俺たちも降りて、入口のゲートに向かつ。

今日の花火大会は地域還元として入園無料だとチラシにも書いてあり、ゲートは自由に行き来出来るように開放されていた。

園内に入ると、メリーゴーランドやコーヒーカップ、名前は分からないが動いて上がつたり下がつたりする子供向けの乗り物が見えた。やはり、ここは仲間内で遊んだり、デートしたりする学生向けの施設ではないようだ。

家族連れが目立つが、それでも花火大会のせいか大学生らしき姿も

ちりほらはあった。

「観覧車と反対側の方に六場があるんですよ。そっちに行きましょ
う」

大越が俺らの先頭に立つて案内しようとするから驚いた。

「お前、ここ来たことあるのか？ 結構きついぞ、この坂」
「いえ、ネットで調べました。思つてたよりも坂ですけど、この先
にいいところがありますから」

大越はそう言うと歩き続けた。

俺も瑞穂さんを横に連れながら、大越のすぐ後ろにいた。

瑞穂さんは時々相槌程度に会話に入つてくるものの、今はただ黙つて坂道を歩き続けていた。

機嫌が悪いのかよく分からなかつたが、ともかく今日は珍しく瑞穂さんのテンションが低かつた。

またまにはそんな日もあつたつておかしくはないけど……大越は気にしていな様子だったが、俺にとつて違和感がかなりあつた。

「ここです、ここ。良かった、あまり人いないですね」

きつい坂道を上つた先は山の中によくある、屋根も付いた休憩所みたいなところだつた。

元々丘陵を切り崩して作つた遊園地だから坂道は多いと聞いていたが、このような休憩場所もあるみたいただつた。

「ここからだと、観覧車の横に花火が上がるのをきれいに見れるんですね」

「観覧車……」

準備良くレジャーシートを敷きながら大越が言い張ると、瑞穂さんが呟いた言葉が聞こえた。

俺が聞き返すと、瑞穂さんはそれ以上何も言わなかつたけど。

やがて花火大会が始まると、花火は少しこなかつたが入る間に溢れることもなくまつすぐと花火を見ることが出来た。

空に打ち上がる花火のすぐ横には、この街一帯からよく見える観覧車のあの光があつた。

「きれい」

俺の隣で瑞穂さんがそう呟いたのを俺は聞いた。

花火から目を逸らして瑞穂さんを少し見ると、目の前に広がる花火に心から感動しているかのような表情のように思えた。

瑞穂さんにとって、この花火は特別だつたのだろうか。

「そりいえば、もう二度とこの花火を見ることは出来ないんですね」

ふとそんなことを口にすると、瑞穂さんは振り返つて俺を見た。

何も変哲もない、ただの花火大会に変わりはないのだが、今年で閉園する以上ここで花火を見ることは二度とない。

そんなことを言いたくて言つたつもりだつた。

けれど瑞穂さんは違うように受け取つたようだつた。

「そうね。でも、それは何に関してもそつよ。同じ物を見れる」と
は、「一度とないわ」

瑞穂さんのその呟きは、今日のことだけを含めて言つてゐることではないと思つた。

そう考えると、何だかその言葉は深かつた。

だが、一日一日を大切にしなきやいけないのは分かつてはいるのだけど、実際それが出来ているわけではなかつた。

大切にしたいのだけど、どうしたら大切に出来るのだろう。俺には分からぬ。

「僕もそう思います」

言葉に迷つて言つのを躊躇つていると、先に大越がそう答えた。
何だか悔しかつたが瑞穂さんの顔を見ると、何かを吹つ切つたのか
段々表情が明るくなつてきた。

「屋台いこー！　お好み焼き食べたいなーもちろんシユンのおいり
で」

「何言つてるんですか、瑞穂さんの方が先輩でしき！」

花火大会が終わる頃には、瑞穂さんはいつも調子だつた。
内心、少し安堵したのを本人には悟られないように思いつつ、後で
こつそりお好み焼きを買って帰ろうと決めた。

「瑞穂さん、僕がおいでりますつてば」

「やつたー、シユンと違つてやっぱ大越くんは分かつてくれるわね
！」

……前言撤回。

帰りはバスが混んでいるのもあつて、三人で並んで駅まで歩いて帰
つた。

もう一度と見ることがないあの花火の色は、八月最後の夏休みの思
い出として残つた。

第五章

九月下旬になると、うちの大学はもう後期が始まっていた。夏休み中はバイトの回数を多くしていたが、再びいつものペースに戻していた。

一方で中成大はまだ夏休みで、瑞穂さんは今頃家で「うるさい」といっている。

今日はバイトで、大越と組む日だったからギリギリに行っていた。ところが店に行くと、そこにいたのは佐藤先輩だった。

「おはよー……『じぞいます？』あれ、なんで佐藤先輩が？」

いるはずもない佐藤先輩がいることで、驚きと戸惑いを隠せずに聞いた。

「オレはまだ休みだし、課題があるから交代して欲しいって大越が昨日言つてきたけど、聞いてないのか？」

「そうでしたっけ？ 聞いてなかつたつす……くそつ、大越の野郎逃げやがって」

最後の方は小声だったが、大越に課題があるということはもちろん俺にある訳である。

でもバイトがあるからって優先して来たのに！

けれどみなこちゃんの姿を見た途端、そんな思いも吹っ飛んだ。みなこちゃんは白いふわふわのスカートを着ていて今日もかわいい。

「おはよー、俊也くん。今日は仲良しの健太くんがいなくて残念だねえ」

「やつなんだよ～すゞく残念だよー。」

さつき自分で言つた一言をなかつたことにあるべらご、俺はみなこちゃんの前で取り繕つた。

うちのコンビニは一つの大学がターゲットなのもあり昼間は混み合う分、民家があまりないためか夜勤の時間帯に客は少ない。それをいいことに、店内に出てからもレジを隔てて三人で話していた。

そんな時、突然ドアが開く音がした。お密さんが来たのかと思い、慌てて「いらっしゃいませ」と俺と佐藤先輩が言ひ。だが、そこにいたのは瑞穂さんだった。

ドアが開いても、瑞穂さんは入口で立ち戻りしていた。いつも大越がいる日に来るのもあって、今日はいないことに驚いているのかと最初は思つた。

だが瑞穂さんの視線は佐藤先輩、そしてみなこちゃんの方に向いていた。

「瑞穂ちゃん……？ なんど？ ドラマの？」

みなこちゃんがそう言つと、瑞穂さんは店内に入らずにドアからへ走り出した。

みなこちゃんもそれを追つ。ドアチャイムの音だけが店内にむなしく響いた。

「えつ、追わないと！」

「中井、今は勤務中だ」

慌てて追おうとしたが、佐藤先輩は冷静にそれを止めた。
勤務中にも関わらず、むやみに店の外に出るのはご法度だ。
先輩の言っていることは分かるし、普段ならそれに従つた。
けれど、嫌な予感がする。

「すみません、出ます！」

佐藤先輩の制止を無視し、店の外に出た。

どこに行つたのか分からなかつたが、しばらくして店の方から声が聞こえてきた。

よく聞き取れなかつたが、一人分の女性の声しか聞こえない。理由は分からないが、瑞穂さんがみなこちゃんを何か怯えさせるようなことをしているような気がして心配になつた。

「ダメですよ、瑞穂さん！」

俺が影から現れると、二人とも驚いた様子だつたが、先に反応したのはみなこちゃんだつた。

「大丈夫だよー、ちょっとお話してただけだから」

そうやつていつものように笑うみなこちゃんを見て、一安心した。だが瑞穂さんを見ると、下を向いたまま座り込んでいて、表情が分からなかつた。

「久しぶりに会つたから、瑞穂ちゃんもびっくりしちやつたみたい。もう大丈夫だし、瑞穂ちゃんも帰るみたいだから。ね？」

みなこちゃんが笑いかけると、瑞穂さんは少しの間の後に頷いた。みなこちゃんの言い方はまるで、小さな子供を言い聞かせているかのようだつた。

そして瑞穂さんは立ち上がりつとめたが、途端によろめいた。慌てて俺は瑞穂さんの横に行き、腕を持つた。

「私、先にお店戻るね。俊也クンも早めに戻つて来てね」

みなこちゃんはそう言つて戻つたが、せめて駅までは送りつと瑞穂さんを立たせた。瑞穂さんがおかしい。

「駅まで送りますから……瑞穂さんつて、みなこちゃんと友達だつたんですね」

髪が邪魔で、瑞穂さんの表情は相変わらず見えなかつた。

だが腕を支えたまま一、二歩歩くと、瑞穂さんは掴んでいた俺の手を勢いよく離した。

「一人で帰れるから、いい」

俺のことも見ずにそつぱつと、駅の方に走り出してしまつた。

ただ、一瞬顔が見えると瑞穂さんが泣いているよつとも見えた。

けれど、心配しつつ明け方近くになつて帰ると瑞穂さんはいつものように寝ていた。

翌日起きた後も、瑞穂さんはいつも通りのわがまま全開で笑つて、その様子から今更掘り返す気にならなかつた。

それのみなこちゃんも何もないようだし、あの夜見た氣がする涙はやっぱり氣のせいだつたのかと思うと段々気にしなくなつていた。

* * *

十月になつて少しずつ肌寒くなつてきたのだが、掛け布団が厚いせいか寝汗はまだかいていた。

そして瑞穂さんとの生活は相変わらずだつた。

中成大の文学部に通い本屋で働く瑞穂さんは、俺の背中が丁度いいと言つて背もたれにして本をよく読んでいる。

俺も読書の秋に乗つかつて、背中に瑞穂さんの重さを感じつつレポート用の本を読んだりするなど、そんな風に過ごしていた。

さすがに服はあの黒い皮のキャリーケースから出し入れしていたが、もう三ヶ月以上過ごしているのもあって着々と部屋に瑞穂さんの物が増えていつた。

棚の上に置かれたドライヤーに櫛、部屋に干されているキャラクターハンガーのタオル。

……？八海山？の他に？笛一？なんて知らない銘柄の酒瓶が棚に並んでいるのはまあともかくとして、どれも男の俺には縁がないものだった。

その日も俺はバイトに向かつていた。

大学周りは木々に囲まれているのもあって、駅から歩く際に見た空には、地元ほどではないが星がいくつか見えたのを覚えていた。星がよく見える、空気が澄んでいる夜だった。

二十三時近くになつてレジ担当の大越と分かれると、バックルーム

で上着を着てからウォーキンと呼ばれる冷蔵庫に入つた。

ウォーキンは、陳列されたペットボトルを後ろから補充しつつ、メールの確認や仕事中の息抜き（と書いてサボリと読む）が出来るほぼ唯一の場所だ。

そこで寒さに耐えつつ、一人なのをいいことに少し手を抜いて作業していた。

「あの、俊也くん。ちょっとこい？」

ペットボトルの箱を開けて補充していると、扉が開く音の後に女の子の声がした。

そちらを向くと、何故かみなこちゃんがウォーキンに入ってきた。

「うわあ、やつぱ寒いー」

「みんなちゃん?! これ着ていじよー」

慌てて、自分の着ていた作業用の上着を脱いで渡すと寒かつた。もちろん後悔はない。

「うー、こめんね。ありがとー」

「どうしたの、こんなところに? 終電大丈夫?」

店から一駅離れたところで、みなこちゃんはオーナー夫婦と一緒に暮らしていると聞いた事があった。

「うん、やつぱ寒いー。でも、その前に言いたいことがある
つたから」「ん、どうしたの?」

向かい合つたまま俺が聞くと、みなこちゃんは俺の顔色を伺つかのよつて上田遣いで見てきた。やばい、すげくかわいい。

「あのねえ」

みなこちゃんは一呼吸置いた。いつもとは少し様子が違つていて、俺まで意味もなく緊張してきた。

「あのね、私と付き合つてくれないかなあ？」

自分の耳を疑つた。夢なのだろうか？

夢だったらここで寝ていてそのまま凍死するのだろうか？
いや夢でもいい、なんだつていい！

だつて、あのみなこちゃんが俺と、つ、付き合つだなんて…！

そつやつてこいつの間にか一人で盛り上がりながら、不安そうに俺を見るみなこちゃんに気付くまでに時間がかかった。

「…………あ、『めん、もちろんだよー』俺いや、付き合つてくだとい
やつぱつと、途端にみなこちゃんは笑つた。

「良かつた、じゃあ私これで帰るから。お疲れさま

「ああ、うそ！ お疲れ様」

上着を返してもうひとつ、みなこちゃんはウォークインを出て行った。

「俺がみなこちゃんと付き合つなんて……ふふふふふ」

結局、終わるのが遅いのを心配した大越が来るまで、寒さも忘れて頭の中で妄想を繰り広げていた。

そのせいで大越にはすぐにバレてしまった。

第6章

その後、遠出したりする話はまだなかつたが、バイトがない日に時々みなこちゃんと会つては喫茶店などで楽しく話した。

そして街中がクリスマスのイルミネーションで輝く頃になつて、「俊也くんつて一人暮らしだよね？ 今度のクリスマスイブ、おうち行つてみたいなあ」とみなこちゃんの方から言つてきた。

大学の友達が遊びに来ると言つと、今まで何かと理由を付けて断つていた。

だが嬉しさのあまりつい、「もちろんだよ、是非来てよ!」と言つてしまつた。

そして帰り道の途中でも、みなこちゃんがうちに来ると考へると色々と妄想が止まらなかつた。

そのせいで、家に着くまで瑞穂さんのこと気に付かなかつた。

「おかげりー、今日も遅かつたねえ。作つてくれたカレー、先食べてるよー」

玄関のドアを開けて中に入ると、俺が行く前に作つたカレーを瑞穂さんは食べていた。

みなこちゃんと付き合つてからも、瑞穂さんは家にいた。大越には口止めしていたから気付かれていなかつたし、既に暦はもう十一月で季節は冬だつた。

「彼女が出来たから出て行つて欲しい」なんて今言つたら、瑞穂さんはどうなつてしまふのだろ?!

そう考へると、何故だか言えなかつた。

何より、瑞穂さんとの生活は楽しかつた。「何かあつたりするんじやないですか?」と夏休み前に大越から言われたが、そんなことは何一つなかつた。

けれどともかく、憧れていたはずの一人暮らしよりも瑞穂さんとの生活の方がいいといつの間にか思つっていた。

「カレーどうですか?」

「うん、おいしいよー」

自分の料理を『おいしい』と食べてくれる人がいてくれるのは素直に嬉しい。

「じゃあ俺も食べますかね」

結局、台所の食器棚から自分のカレー皿を出しながら、さつきの話をすることにした。

「あのー、瑞穂さん」

距離のせいでいつもより大きな声で話しかけると、瑞穂さんは食べながら「なにー?」と返してくる。

「あのですねー、来週の木曜、午後からでいいんで家空けてくれませんかねー?」

瑞穂さんは食べ途中だつたみたいで飲み込んでいるらしく、返事が返つてくるまで時間がかかつた。

「いいよ」

ご飯とカレーを皿によそった頃になつて、そう返事が聞けた。良かつたと安堵しつつ、今までにないぐらいにクリスマスイブが来るのを期待して待つた。

*

*

*

そして一十四日の朝。昨日から冬休みだったが、もちろんこつもより早く起きた。

だが起き上がりて背中を触ると、やはり濡れている。
もう十一月なのに今だに汗をかいていた。実は汗つかぎだったのか、俺？

ともあれ、この日のことを考える度に浮き足立っていた。何せ、今日が初めての密室デートだ。

もし、あのみなこちゃんと……キキキキキスなんてして……うわあ、俺どうすれば！

もう何度も自分が分からなかつたが、朝から自然と顔が緩んでしまつた。

そんなこんなで、みなこちゃんとは外で会つてお昼を食べてから家に来る予定だつたから、俺は早くから家を出た。

瑞穂さんは家を出る時にまだ寝ていたが、午後までには家を空けてくれるはずだつたし、部屋の掃除は前日に全部済ませていた。
だから何もかもが万全で、安心してみなこちゃんを招き入れられると思つていた。

「じーじが俊也くんのおつか？」

白いダウンジャケットの下に、ピンクのフリルが付いたワンピースを着たみなこちゃんと一緒に家に戻ったのは午後一時近くだった。
扉の前で、先に歩いていた俺は足を止める。

「せうせうへ、ここなんだ。見た通りボロヘビーメンね」

「ひひん、全然だよ~」

明らかに気を遣つてもうこながらも、みなこじりやんと並んで鍵を入れてドアを開ける。
そして中に入ると捨て忘れたのか、玄関にゴミ袋があるのが内心気になつた。

「わあ~、これが俊也くんのお部屋なんだあ~」

奥の方に進むとみなこじりやんはそう言つたが、一方で驚きのあまり俺は言葉が出なかつた。

棚に並んでいたはずの酒瓶は一つも残されていなかつた。
それ以外にも、部屋中に散らばつっていた自分の物ではなかつた物たちは、あるはずの場所に何一つ置かれていなかつた。
何より、部屋の隅に置かれていたあの黒い皮のキャリーケースがなかつた。

瑞穂さんがいた形跡が、どこにもなかつた。

あたりを何度も見回す俺に「どうしたの?」「みなこじりやんは声をかけてきた。

だが、それに答える余裕は全くなかつた。

ふと、ゴミ袋があつた気がして玄関に行く。

青い色の燃えないゴミ袋を開けると、中からは夏に使つたあの浮き輪やビニールバックが出てきた。

『また、来年行こうね』俺が頷くと、無防備に笑顔を見せた瑞穂さんの姿が過ぎる。

他にも何かないかと手当たり次第探す中、玄関の新聞受けを開けると封筒が一通入っていた。

慌ててそれを開ける。中には瑞穂さんにいつか渡した合鍵と、一枚のルーズリーフが入っていた。

ルーズリーフの方に意識が向いていると鍵を落とし、無機質な音が響く。

けれど拾つ氣にはなれなかつた。

手が震えながらもルーズリーフを広げる。

中には詩のようなものが書かれていたが、パツと見ただけでは意味が読み取れない文章だった。

苛立ちながらも、それを丸めてジー・パンの後ろポケットに入れた。

「俊也クン、ビうしたの？」と後ろから心配そうな聲音で再び尋ねられた。

みなこちゃんの方を俺は振り返る。

「いめん！」

それ以上は何も言えなかつた。

ともかく、心臓の音だけが体中に響く。瑞穂さん！

「どう行くの、俊也クン？！ 待つて 「

みなこちゃんの言葉が終わらないうち、「俺は玄関から飛び出していた。

*

*

*

「どこのことなんだ?...」

焦りのあまりついそんな言葉が出ると、途端に周囲の視線が俺に集まる。

だがそれも一瞬で、何事もなかつたかのようにな人々は歩き出していく。

瑞穂さんとはもう、会えないのか?

あれから勢いで飛び出し、玉那駅に来ていた。クリスマスイブなのもあって、昼下がりの今も曇り空だったが駅前の人通りはいつもより多かった。

そんな人混みの中を見回しながら走り歩く。あの田立つ黒い革のキャリーケースを引きする姿を田印に探すが、瑞穂さんの姿はどこにもなかつた。

思い起こせば、こんな時に瑞穂さんがどこに行くかなんて見当も付かなかつた。

よく行く場所どこのか、バイト先がどこの本屋なのかさえも知らない。

俺と暮らすまでどこにいたかも聞いた事がなかつた。

頭の中で浮かぶ瑞穂さんは理不尽で暴君で突拍子もないことばかり言つて、でもいつも笑つて……それから……それから……

瑞穂さんの趣味は?

瑞穂さんは大学で何を学んでる？

瑞穂さんの出身校は？

瑞穂さんの好きな物は？

瑞穂さんの誕生日は？

俺は何一つ、答えられない。

「長谷川瑞穂って、一体誰だ……？」

走り続けた足を止めて、そう呟く。半年近く一緒に暮らした相手のこと有何一つ知らない。

……いや、知らうとしなかつた。そんなことに今更気付いた。

探す宛もなく、駅前の広場で途方に暮れた。

手の冷たさを感じ、癖でついジーパンの後ろポケットに手を入れると、中に紙の感触に気付く。

取り出してみると、家を出る時に勢いで入れたあのルーズリーフがくしゃくしゃになつて入っていた。

焦っていたせいで中身をちゃんと読んでいなかつたことに気付き、もう一度広げる。

『君にとつては

座る席がなくて困っていた人に隣の席を譲つてあげたら

その人は眠ったまま 寄り掛かってきたけれど
疲れているのだな と、肩に重さを感じても
起こさずにそのまま枕になつてあげた
ただ、それだけの事。

それが あたしにとつては

求めていた優しさで

ずっと感じていたい温かさだった

ただ、それだけの話。

けれど二人とも もういないこと

もう、耐えられなかつた。』

「これって、どういう意味なんだろう……？」

訳が分からぬ。この詩が何を言つてゐるのか、俺には理解出来なかつた。

けれども、ルーズリーフが入つてゐた封筒の中には渡してゐた合鍵があつたから瑞穂さんがこれを書いたことは確かだつたし、手掛けりはこれしかなかつた。

大学の教養科目の授業か何だつたか忘れたが、『詩は何も言つていない。だから何度も読むんだ』と偉そうに言つてゐた教授がいた。けれど、この詩の中に伝えたいことが入つていて俺は思う。だからこそ、それが分かりたくてもう一度よく読んだ。

「……『二人とも』って、どういうことだ？」

二人のうちの一人は俺だと何となく思う。

だつたらもう一人は誰だ、なんて聞かれても分からなかつたが、一応俺に向けて書かれているのだから自分も知つてゐる人のような気がする。

だが瑞穂さんの交友関係さえも俺はよく知らない。

けれど、思い出せ。半年の間に、必ずどこかで……そつだつた、肝心なことを忘れていた。

幸いに駅は目の前で、ポケットにある財布には定期が入っている。
改札をダッシュで越え、来たばかりの下り電車に飛び乗った。

*

*

*

「……どうした？」

中成大近くにあるアパートの玄関。

突然押し掛けた俺に、黒のズボンに上は白のYシャツ姿で出迎えた佐藤生人先輩は少し驚いた様子だった。

「お話が、あります」

三ヶ月前、瑞穂さんがみなこちゃんと偶然顔を合わせた日。あの日はつい、みんなちゃんと瑞穂さんのやり取りに意識がいつてしまっていた。

だが店に入った時、瑞穂さんが先に視線で捉えていたのは佐藤先輩の方だった。

その様子から、少なくとも一人が知り合いであるように思えた。俺の表情を見て、佐藤先輩も何かを察した様子だった。

「ああ、いいだろう」

招き入れられて靴を脱ぐと、廊下を抜けて部屋に入った。

前に大越を含めたバイト仲間と大勢で来たことがあったが、改めて室内を一望する。

同じワンルームでも俺の家と比べて三倍くらいの広さを感じる。室内は白や黒を基調としたシンプルな家具でまとめられていた。それもあって、ダイニングキッチンにある食器棚の中でも、手前に

置かれたパステルカラーの優しい色をした赤と青のそれぞれ二つのマグカップがこの部屋に不似合いで妙に目立っていた。

勧められた椅子に俺が腰掛けると、佐藤先輩は白の無地のカップに紅茶を入れてくれた。

「ミルクと砂糖はいくつ必要だ？」

「いえ、なくて大丈夫です」

そう答えると珍しく先輩が少し笑つたので「どうしたんですか」と聞いた。

「ミルクと砂糖を好む奴がいたからもんだからな、つい。そいつはミルクがないと飲めないからってコップ半分まで牛乳を入れて、砂糖なんて軽く五杯は入れていた」

まるで何かを懐かしんでいるかのような表情を佐藤先輩はしていた。こんな先輩を見るのは滅多にない。

そういうえば、大量の砂糖と牛乳が入ったミルクティーを瑞穂さんはよく飲んでいた。

「……長谷川瑞穂さんを、先輩はご存知なんですか？」

先輩は深く頷きながら、テーブルを挟んだ向かい側に座った。

「ああ。知っているというより、瑞穂とは高校からの友人だ。お前のどこに行くよう言つたのもオレだしな」

「えっ！？ そなんですか？」

半年の間、瑞穂さんと過ごしていただがどちらも初耳の話だった。

「なんだ、瑞穂から聞いてないのか？」

心の底から驚いている俺とは対象的に、佐藤先輩は涼しい顔をして紅茶を啜っていた。

「聞いてないですよ！ それに、先輩があの瑞穂さんと高校の時からずっと友達？！ 全く信じられないんですけど……でも、なんで俺の家を教えたんですか？」

「一人暮らしを始めるつて言つてたし、バイト先に住所も置いてあつたしな」

確かに、住所がどこから漏れたかは不思議に思つていた。だが、それよりも聞きたい事があつた。

「そうじゃなくて、どうして先輩は瑞穂さんご俺の家に行くようと言つたんですか？」

すると、思つてもいなかつたような言葉を佐藤先輩は発した。

「お前なら、一番信用出来ると思つたんだ」

さつきと違つて淡々とはしていたが、佐藤先輩は笑うことなく俺をじっと見ていた。

「どうこつ、意味ですか？」

尊敬している先輩からの言葉に驚きを隠せなかつた。先輩は立ち上がり、キッチンの方へゆっくりと歩く。しばらくして振り返ると、俺の方を見た。

「オレと瑞穂が出会ったのは、高校一年の終わりだった

そしてやつくりと、先輩は話し始めた。

第七章

昼前から白く重い雲に街中が包まれていた。

それでも、大学の最寄りから新宿方面に向かつて一駅の場所にあるこの街も、クリスマスの飾り付けによつて赤と緑の色が溢れている。バイト先である？晃文堂書店（ひがぶんどうしょてん）？の店内にもクリスマスツリーが飾られていた。

「長谷川さん、お疲れさん」

「お疲れ様です」

いつものように店長に挨拶して店から瑞穂は出る。

だが、いつもと違つて夕方からではなく開店から昼過ぎまでという時間にシフトを入れたため、店を出ても外が明るいことに違和感があつた。

ジーパンに黒のコートを羽織つていたが、それでも十一月の寒さは身に染みた。

荷物になるキャリーケースはバイト前に駅のロッカーに預けた。

少し距離があつたが、引き取りに再び駅に向かおうと歩く。

その途中で、紺一色のスカートとブレザーに赤いネクタイを締めた女子高生二人組と擦れ違つた。

その二人が通り過ぎると、瑞穂は振り返る。

あれは、瑞穂が卒業した高校の制服だつた。

紺一色は地味そうに見えて、近隣の高校はチェックばかりなのでかえつて目立つ。

なので、少し前までは地域住民なら一目見て学区三位の高校のもの

だとすぐ分かる。

だが瑞穂が卒業した翌年の入学生から、紺の上に水色の線が入った
チェックのスカートに変わった。

したがって、紺のあの制服を着ているのは今三年生しかおりず、
瑞穂も久しぶりに懐かしい制服を見掛けた。

ふと、駅に続く道の途中にベンチを見付けて座った。

あの制服を着ていたのはもう一年以上も前だと考へると、必然と高
校時代のことを思い返す。

更に遠くにあの観覧車が見えると、思考の海から逃れられるわけも
なかつた。

幸いなことに時間なら果てしなくある。

瑞穂はベンチに深く寄り掛かると、ゆっくつと深く息を吸つた。

* * *

両親は幼い頃に離婚した。

母には既に男がいたため瑞穂は父方に引き取られたが、その父も間
もなく再婚した。

その再婚相手は父よりも随分と年上で、瑞穂より少し年上の男の連
れ子が一人いた。

義母はもちろん、父もその子たちには優しくしたが、両親ともに瑞
穂には辛く当たつた。

例えば、父は上の子二人だけ動物園や遊園地に連れて行つたり、自転車をプレゼントしたりした。

だが、瑞穂は自転車どころか衣服さえも満足に与えられず、常に義兄たちが着なくなつたボロボロの男児用の服を着ていた。食事も義兄が残したものを見られたらまだ良い方で、食事が余らなかつた際は瑞穂の分はなかつた。

瑞穂の顔が実母似だつたのを気に食わなかつた義母はともかく、父までもそんな瑞穂を見なかつたことにして、幸せな四人家族の一人として過ごしていた。

「お父さん、どうしてあたしにはくれないの？」

「ラジコンをプレゼントされて喜んでいる義兄たちを見て、父に向かつてたつた一度だけそう聞いた事がある。

別にラジコンや何かが欲しい訳ではなかつた。

ただ、何故なのか聞きたかった。

「お前に優しくすると、みんなやきもちを妬いて大変だろ？　お前のためでもあるんだ。それに、お前もお父さんに幸せになつて欲しいなら我慢しなさい」

父は小声でそう言つと、義母からの視線を感じて「しつしつ」と、瑞穂を手で払つた。

まだ若かつた父は余裕が無く、今度こそ結婚生活を成功させたいと思、新しい妻に頭が一切上がらなかつた。

そんな姿を見てきた瑞穂は父の立ち位置が分かつたし、幼心に父の

幸せを祈る気持ちはあつたので期待するのはやめた。

小学校の頃からその身なりを理由にいじめられることが多くあり、瑞穂は読書に没頭した。

学校の図書室はタダで本がいくらでも読めた。

本の世界にいる間は、外の世界の事なんて忘れていた。

その分、下校時刻のチャイムが本氣で憎かつた。

チャイムが鳴ると、本を抱えて外に出るしかない。公園に行くと同級生にいじめられるし、日が暮れてだいぶ経つまで家には入れてもらえなかつた。

結局、スーパーのベンチで読んだりしたが同級生に見付かる事もなく、本を読む場所には困つた。

中学生になつて義兄が使つていたボロボロの自転車を貰い、二駅離れた市立図書館に行く術を身に付けるまでその苦労は続いた。

中学でも成績は比較的優秀に保ち、返済不要の奨学金を糧に高校に通える目途はついた。

だが家庭環境は何も変わらないままで、父は相変わらず義母の味方だつた。

そして高校入学前の春休み、高校一年生で次男である義兄からついに暴行を受け、それから何かが吹っ切れたかのように家に帰らなくなつた。

瑞穂はそれほど美人というわけではなかつたが、夜の街を一人で歩くような少女に群がる男は多かつた。

瑞穂があの紺色の制服を毎日纏うようになる頃には?彼氏?という名の男を作つては、男のマンショングアパートを転々としていた。

そんな日々を送るまではずっと、瑞穂は一人だつた。

けれど、体さえ許せば男たちはいつでも一緒に眠ってくれた。

体温の温かさがすぐそばにあること。

それは瑞穂にとって、こんな自分でも誰かに求められているよう思えて嬉しかった。

そんな生活をしつつ、高校には毎日通っていた。

都立の進学校だったが山間に位置し自然に囲まれていたため通学は不便だったが瑞穂にとって授業は苦痛どころか、知らないことを知れるので楽しみだった。

しかし一方で、テレビを見る環境がなく携帯電話も持っていないなかつた瑞穂はクラスの女子と話が合わず、学校でもずっと孤立していた。それでも、高校で初めて友達が出来た。

良い子だとクラスでも評判の女子で、周りの目を気にせずに瑞穂と接し、流行の話題ではなく学校の話などをしてくれた。

結局高校時代は当たり障りのない話をするぐらいの関係だったが、それでも瑞穂にとってかけがえのない友達で、本来持つ明るさをそのままの子の前では出せた。

しかし教員の前の瑞穂は大人しく授業態度も真面目だったため、夜に男の家に行くような生徒だとは担任さえも思わなかつた。

面談の際も義母は適当に話していく、家に帰つていなことも担任は気付かなかつた。

結局、高校に上がってからも表面上は明るい五人家族のままだつた。

そして相変わらず、読書だけが唯一の楽しみだつた。

高校の図書室は小中と比にならない規模で、部費が払えなかつた瑞穂は部活に入らず、夕方までずっと図書室で本を読んで過ごしていだ。

成績が悪いと奨学金が打ち切られてしまうのもあり、テスト前だけ

は必死に図書室で勉強した。

そんな生活で最終下校時刻まで図書室に毎日いると、放課後に残るメンバーは限られてくる。

進級が近くなつた季節。

まだ気温は低く、少しでも温かな口差しが入るよう瑞穂は窓の近くの席を選んでいた。

そんな窓際の中でも一番端の席が特に気に入りで座つていると、自分と向かい側の席にいつも同じ男子が座つていていた。

黒髪で身長はやや高めで、読んでいる本のタイトルを見ると歴史小説が多かった。

制服を着崩している男子はよくいたがその人は第一ボタンだけ外し、ネクタイも少し緩く締めているぐらいだつた。

その程良くルーズそうな姿が、融通の利きそうなイメージを瑞穂に少し抱かせた。

顔に覚えはなかつたが、後に教室が離れている特進クラスの人だと知つた。

相手は瑞穂の存在に気付いていないようだつたが、最後まで残つていると図書室を出る時間が大抵重なり、必然と門を出るまでの道のりが一緒になる。

だが寡黙そうで話し掛けにくく、瑞穂と言葉を交わすことはなかつた。

そして春休みも近付いた日、春の日差しが気持ち良過ぎてその日はついつた寝をしてしまった。

「長谷川さん、いい加減起きてちょうだい。もう最終下校時刻よ」

他の生徒たちも帰り支度をしている中、仲良くなつた司書教諭に起こされて瑞穂も鞄を持つと最後から大体一番目に廊下に出た。そのままいつものように生徒用玄関に向かつて靴を履き替えたが、ドアを押しても開かなかつた。

「どうしよう、出られないよ……」

独り言のよつこひづれくと、途端に後ろから声が聞こえた。

「職員用玄関からなら出られるぞ」

振り向くと、図書室でよく一緒になるあの男子が瑞穂のことを見ていた。

その時初めて、その男子の声を瑞穂は聞いた。低かつたが、よく通る声だった。

それが、佐藤生人だつた。

それまでクラスが離れていて全く話したことがなかつたが、何となくその存在を気にしていたのもあり、そのまま駅まで歩きながら会話を交わした。

それ以来、図書室で顔を合わせた後、駅まで歩いて一緒に帰ることが多くなった。

生人は吹奏楽部に入っていたが、活動日以外は図書室に顔を出した。そして生人も瑞穂と同じで携帯を持ってなく、流行などには興味がないような人だった。

そんな二人は好きなジャンルは異なっていたが、本の話題で盛り上がる事が出来た。

その頃、瑞穂は高校卒業後も大学で学びたいとは思っていたが、進路についてそれ以上は考えていなかつた。

だが、生人とよく話しているうちに、自分は心の底から本が好きだと気が付いた。

そこで図書館司書になりたいと思い始め、少しづつだが周辺にある大学の文学部を調べるようになつた。

しかし瑞穂は理系科目が比較的苦手でレベル的に都内の国公立大は考えらなかつたが、私大の殆どは授業料が高額で目指すのも躊躇われた。

生人は、言葉数は少なかつたかもしれないが聞き役として長けていた。

相槌を入れて話題を引き出すのも得意で、それもあつてか瑞穂は進学への不安を話した。

更に、そうやって相談していくうちに、今まで誰にも言えなかつた家庭の事を生人には話せた。

「家なんか帰りたくない。だから、今日もあいつんちに行くの
「そりゃ」

大学進学を考えるにはテスト前以外も勉強しなくてはならなかつたが、男の家に行つたら勉強どころではなかつた。

生人はそんな瑞穂をじっと見ながら、否定も肯定もしなかった。

瑞穂がいつも以上に荒れたのは、高校二年生だった冬のある日のことだつた。

荷物を取りに久し振りに帰つて自室に籠もつて居間の方から張り上げた声が聞こえてきた。

「いつまであんな他人の面倒見なきゃいけないわけ？　いい加減出て行かせてよ」

義母が話している相手は父のようだつたが、父の声は聞こえてこない。

「……出て行けるなら、とつべで出て行つてるわよ」

そつ言いながら、田から涙が溢れているのは何故なのだろう。

結局、珍しく父から後日話し掛けられ、高校卒業と同時に出て行くよう言い渡された。

「いめんな、俺は何もしてやれない」
「ううん」

そう返すことしか出来なかつた。

すっかり老け込み、昔と違つて瑞穂を追い込むような言葉を父は言わなかつたが、いつになつても父は無力だつた。

瑞穂は幼かつたあの頃から、父に期待をするのはやめていた。

だが親からの援助もなく、借りた奨学金だけで都内で一人暮らしをするのは現実的な話ではなかつたし、父の稼いだお金はあの女が全て握つていた。

履歴書の保護者欄を埋めてくれる人がいる訳もなく、バイトも出来なかつた瑞穂は修学旅行に行くお金さえもなかつた。このままでは、高卒で就職するしか道がなくなつてしまつ。

翌日図書室で生人に会つた途端、瑞穂は涙をこらえられなくなつてしまつた。

生人はそんな瑞穂を学校近くの公園へ連れ出した。

「あたし、大学行きたい」

雪が降り出しそうな白い空の下で、瑞穂は泣きながらもそう訴えた。そんなわがまま、今まで誰にも言えなかつたが生人だけは言えた。

「お前、中成大の文学部行けよ」

生人から突然そう言われ、驚いた瑞穂は顔を上げた。

中成大は都内にある私大で、公共機関を使うとここから一時間近くかかる距離に位置していた。

「中成大の奨学生制度なら、センター試験で学部」と上位五人以内に入れば授業料四年間無料だ」

「上位五人？！ いくら文系教科だけでも、あたしなんか入れるわけないじゃん！ それに、授業料がタダでも、家借りたりするお金なんかないよ……」

特進クラスの生人とは違い、瑞穂は奨学金を支給されてはいたが全

体では中の下レベルだった。

何より大学に通う以前に、生活が成り立たなければ最悪フリーターになるしかない。

だが、生人は譲らなかつた。

「お前なら出来る。それに、オレが行かしてやる」「え……？」

その言葉の驚きのあまり、瑞穂は顔を上げた。

「中成ならある程度レベル高いし、受かつたら一人暮らししていいつて親から言われてる。オレは理学部受けるから、お前も文学部受けろ」

言われた意味がすぐには分からず、瑞穂は何も言えなかつた。
だが、生人は淡々と続ける。

「一人暮らししたら、オレンとこ来いよ。あ、家賃と食費と水道光
熱費は半分払えよ」

願つても無い話だつた。

その条件なら生活も出来るし、更に中成大の文学部は司書資格取得に配慮された授業カリキュラムが組まれていることは知つていた。

「本当に……？」
「ああ」

瑞穂の人生の中で、ここまで瑞穂のことを考えてくれる人なんて誰もいなかつた。

確かに中成大は難関大と呼ばれる大学だつた。

無謀な話かもしない。けれど、それしかないと思つた。

何より、『オレが行かしてやる』と言つた生人を信じてみよつと思つた。

「……うん。あたし、中成大受けるよ」

瑞穂がそう言つと、生人は満足そうに笑つた。

「よし、決まりだな。じゃあ、今日から毎日帰りに中央図書館寄るぞ。あそこは十時まで開いてるしな」

「えつ、でも……」

今日も男の家に行く約束がある。だが、生人の意思は変わらなかつた。

「お前、大学行きたいんだろ？　じゃあ行くぞ」

生人はそれ以上聞く耳を持たずに入き出し、瑞穂も慌てて追つた。それ以来、生人の部活が終わるのを図書室で待つこともあつたが、学校を出ると生人と一緒に中央図書館に寄つて毎日勉強するようになつた。

生人の親は共働きで門限も緩く、お互ひ十時まで図書館で勉強出来た。

それに加えて土日も昼間から勉強する生活で、男と会う余裕がなくなつた瑞穂は必然と夜だけは自室に帰つて寝るようになった。だがそれは、苦痛以外の何でもなかつた。

義兄のこともあつたが、ドアの向こうにいる義母からの「どうして帰つてくるのよ」などの罵声で眠れない日は多々あつた。

「はやくここからだして……いくと

ベッドの中で泣きながら呟いたが、『大学に受かれば、生人がこの檻から出してくれるんだ』と信じ、目を閉じて耐え忍ぶ日々を過ごした。

生人は元々成績も優秀で、瑞穂の良い先生役となってくれた。

塾にも予備校にも通わずに、どちらも中成大に奨学生として合格出来たのはそんな日々のおかげだった。

そして瑞穂は高校卒業と同時に、キャリーケース一つで家を出た。駅前から続く桜並木の下を歩いていると、落ちてきた花びらの色が黒のキャリーケースの上で映えた。

そのまま歩き続けると、前に地図で教えてもらったアパートに着き、ドアチャイムを押すと生人が出てきた。

「ほんとに来ちゃったよ」

「ああ」

新居であるアパートの玄関先で生人は微笑むと、瑞穂を温かく迎え入れた。

家電は生人の親が買い揃えてくれていたが、まず生活用品を揃えよう

うと、一人で買い物をしに街に出た。

シャンプーやリンス、歯ブラシに一人分の食器……それに。

「あ、これがわいくない？」

瑞穂が手を伸ばしたのは、赤と青のパステルカラーがそれぞれ基調の、一つのマグカップだった。

「どっちか買おー。あーでも、どっちもかわいいなあ……どうしよう

そつやつて瑞穂が迷つていると、呆れたように生人が言葉を挟んだ。

「どうちも買えばいいだろ。一個は引っ越し祝いに買ってやるよ
「やつたー、じゃあ一つ買っちゃおうー。」

そう言つて、瑞穂は一つのマグカップを他の物と一緒に買い物力ゴ
の中に入れた。

それ以来、お互に決めた訳ではなかつたが、一人で紅茶を飲む時に
は赤が瑞穂で青を生人が使うようになつた。

どちらが紅茶を入れようとそれは常で、瑞穂にとつてはそのマグカ
ップがまるで二人の象徴のように思えた。

元々気が合つっていたのもあって、生人との同居生活は楽しく過ごせ
ていた。

だが夜になつて眠ろうとすると、時々どうしても寝付けなかつた。
不安で涙が止まらなくなると、横で眠る生人の布団に瑞穂は潜り込
んだ。

「どうしたんだ？」

最初のうちは生人もそう聞いていたが、布団から追い出すようなこ
とはしなかつた。

「夜に溶けてしまいそうで、怖い……自分がいなくなつても誰も悲
しまないんだって、そう思つてどうしようもなく怖い……」

実家では自らの存在さえも否定され続けていた。

そんな瑞穂にとって暗闇は敵で、孤独を感じさせる存在だった。

それは昼間のあの明朗さとは対照的だったが、そんな弱さも持つて

いた。

生人は何も言わずに、横にいる瑞穂の背中をさすった。
そうされると、生人の布団の中で安心して眠りにつくことが出来た。

「付き合っていないのに、そんなのおかしいよ」

高校時代の友人と久しぶりに会った際にあの生人と暮らしていると言ふと、そう返されたことがあった。

けれど瑞穂は、その非難を疑問を感じた。

生人に恋人はないし、自分たちは？友達？なのだから問題はないと思っていた。

ただ、今まで横にいるだけで手を出してきた男たちと、生人が違うことだけは分かつていた。

瑞穂にとつては、この頃は今まで殆ど経験したことがない、？幸福？と呼べる毎日だった。

食事は料理も得意な生人が作ってくれていたが、実家では自分の分の食事なんて用意されなかつた。

実家にいるだけで責められていたのに、生人と暮らす家は見えない温かさで満ち溢れていた。

初めて存在を肯定された瑞穂は、四季が過ぎる様子をゆっくりと生人の横で感じることが出来た。

けれども一方で、幸せであると同時にいつまでこの幸せが続くのだろうかと不安もあつた。

いつかは生人にも恋人が出来て、自分が出て行かなくてはいけない日が訪れるのではないか。

今だつて自分が勝手に押しかけているだけで、本当は彼にとつて迷惑なのでは。

そう考へると、不安は止まなかつた。

生人の手は温かいゆりかごを揺らすと同時に、瑞穂を奈落の底まで落とすことも出来る手だった。

そして、その予感は的中した。

「彼女が出来た」

もつすぐこの家に来て一年が経つ頃だった。
昼食を食べていた部屋の中にまで春の日差しが入ってきていた。
その日差しの温かさからか、とてもじやないが生人の発言から冷た
さを感じることが出来なかつた。

「誰なの？」

段々と事態を把握してきた時、瑞穂はかるうじてそう聞けた。

「バイト先が一緒で、同じ吹奏楽だつた子。あ、うちの高校だから、
お前も知ってるかも知れないな。名前は」

田代美奈子さん。

そう言われた時、時間が止まつたような気が瑞穂にはした。
『付き合つてないのに、そんなのおかしいよ』

そう言つた美奈子は、瑞穂にとつて唯一の友達だつた。

それから、家に美奈子が来ると言わたが、反応する氣力は瑞穂に
はもうなかつた。

それでも『出て行つてくれ』とは生人は決して言わなかつた。
だが、それがまた瑞穂にとつて苛立つた。

生人はするい、としか思えなかつた。

そしてふと、そんなことを考へてゐる自分は、あの家から救い出してくれた生人に惹かれていないはずがないとやつと氣付いた。そして氣付いた以上、もうここにはいられなかつた。

生人が深夜にバイトに行つてゐる間に、瑞穂は荷物をまとめた。あのキャリーケースに次々と自分の物を詰めて行つたが、マグカップだけは入れのを躊躇つた。

キャリーケースはもう一杯だ。それに、行く宛もないのに陶器を持ち歩くのは気が引ける。

何より、どうしてもこのマグカップを見ると、生人ととの日々を思い出してしまう。

結局、食器棚に伸ばした手を引っ込め、マグカップはそのまま置いて瑞穂は生人の家から出た。

そしてまた昔のように男の家を転々とした。そのまま大学二年生になつてしまらしく、晃文堂書店でのバイトを終えて外に出ると生人が待つていた。

丁度、今いる家の男との雲行きが悪くなつてきた頃だつた。

「生人？　どうしたの？」

学部が違うのもあつて会うのは久々で、生人の家に連れ戻されるのではないかと一瞬期待した。

だが、次の瞬間にはその期待は打ちのめされた。

「お前、どうせ行くとこないだろ。ここに行けよ」

渡された紙にはここから数駅先の住所と、男の名前が書かれていた。

「何よ、これ？」

「俺のバイトの後輩。一個下だけど、そいつんとこ行けよ」

男の家を紹介されたことに苛立つたが、行く場所に困っていたのは事実だった。

その向かつた先で出会ったのが中井俊也だった。

第八章

佐藤先輩は一時間近く、ゆっくりと瑞穂さんの話を聞かせてくれた。瑞穂さんの家のこと、高校時代の瑞穂さん、そして先輩と暮らして出て行つた瑞穂さん。

「じゃあやつぱり、これは佐藤先輩のことなんですか？」

俺はあのルーズリーフを渡す。佐藤先輩はそれを受け取つてじつと見ていた。

「多分お前のことだらうが、『一人とも』のもう一人はオレのことだらうな」

しばらくして、先輩は俺にルーズリーフを返した。

「瑞穂がオレを必要としてくれていたのは分かつていた。だから、オレに出来ることがあればしたかつたんだ」

それが先輩にとつては、瑞穂さんの勉強を見たり、生活環境を与えたことなのだけ。

俺も最初は生活費を見返りに瑞穂さんと暮らしていた分、恋人ではない異性と暮らすことに関しては否定する気はない。だが、それ以外で先輩に聞きたいことがあった。

「でも、どうしてみなこちゃんと先輩は今、付き合つてないんですか？」

「瑞穂が出て行つてしばらくして、美奈子が家に来た時に『やつぱり付き合えない』って言われたんだ」

なんとなく、その理由が今の俺には分かる気がした。

「あのマグカップ……」

「ああ、片方は瑞穂のだ」

二つのマグカップは今でも食器棚にある。

その二つだけがこの部屋の中で浮いていた。

そして、使われることもないのに並んで置かれていた。

「先輩、どうしてマグカップはあるままに?」

「片付けるのもどうかと思つて……一つは瑞穂のだしな」

ああ、やつぱりそつか。

だから、みなこちゃんは。

「先輩、俺、ずっと先輩のこと尊敬してました。けれど、言わせてもらいます」

俺は真っ直ぐと、佐藤先輩の方を見る。

「先輩は、親切心で瑞穂さんにそつやつていたのかもしれません。けれど、そんなの優しさでも何でもありません。

ただの偽善です! 先輩はどれだけ人を傷つけているか、分かつていますか? !

どんなに先輩が優しくても、みなこちゃんのことと瑞穂さんが知つた時、どれほどの絶望を感じたのだろう。

だったら、最初から優しくしない方が瑞穂さんのためだったのではないか。

あんな、詩のような文章を書いた瑞穂さんの想いを考えたら。

だが、俺も他人のことは言えなかつた。先輩はただ黙つて、俺を見続ける。

「確かに、今まで俺もそだつたかもしません。けれど先輩と違つて、俺は反省しました」

尊敬してゐる先輩を前に生意氣なことを言つてしまつたことに段々後悔してきた。

心臓の鼓動が「うわー」と。

けれど、ここで終わるわけにはいかなかつた。

一番言わなくてはいけないことがある。

「それに、瑞穂さんはばぐーたらで俺が家事とかしてましたけど、先輩と違つて『俺に出来ることがあればしたかった』なんて言いません。

俺はただ、瑞穂さんといふと楽しくて、一緒にいたかつただけですから！」

佐藤先輩は何やら考えている様子だったが、しばらくして力を抜いたかのように息を漏らした。

「そうか。オレも、甘かつたな」

そして佐藤先輩はおもむろに携帯電話を取り出し、誰かに電話をかけている様子だった。

「もしもし、瑞穂。オレだけど」

その姿を見て、しまったと思った。

気が動転し過ぎて、瑞穂さんに電話をするといつ選択肢を忘れていた。

「なあ、あのマグカップどうしたらい？」

先輩が聞くと、瑞穂さんのあの明るい声が電話口から漏れた。

「好きにしていいわよ

「そうか。分かった

佐藤先輩が携帯を持ちながらしつゝ頷くと、瑞穂さんの声が再び聞こえてきた。

「ねえ、教えて。生人にとって、あたしは何だった？」

そう聞かれた佐藤先輩は明るい顔をして答えた。

「一緒に暮らしてちつとも苦痛じやなかつた。だから理想の結婚相手だつたけど、好きとかとは違かつた」

「じゃあ今度こそ、好きになれる人を幸せにしなよ」

思つてもいな^い言葉だつたらしく。先輩は苦笑いで返した。

「ああ。 そ^うだな」

そこで俺が電話を代わらうと先輩から携帯を受け取り、「瑞穂さん、あの」と呼び掛けた途端、電話は切られた。

「瑞穂さん……」

俺が落胆していると、横で佐藤先輩はもう一度電話をかけ直しながら「その様子じや、お前が電話かけても無駄だつたな」と少し笑つた。そして電話は繋がつた。

「ああ、 美奈子か?」

瑞穂さんにかけたかと思つていた俺は「え?」と声を上げた。
だが先輩は動じずに、みんなちゃんを先輩の家に呼び出し、電話を切つた。

「お前もいるつて云えといったぞ」
「あつ。 ありがとつ^いります。でも、俺ここにいていいんですかね?」

俺の様子に佐藤先輩は苦笑した。

「お前が何言つてんだよ。店の連中もとっくに気付いてるぞ」「いや、先輩。俺の方こそ、ずっと前から気付いていましたよ」

先輩は知っていたのか知らなかつたのか、その表情からかはよく分からなかつたが、「そうか」とだけ答えた。

「みんなちゃん、いつも先輩が来る田だけ店にいますからね。さすがに俺でも分かりますって」

告白された時は夢でもいいやと思つてついOKしましたけど。一応好きでしたし、先輩とくつづくまで会えるだけでも良かつたんで

で

「お前、結構自分を犠牲にするんだな」

夢だと分かつていて付き合つていたことに関して、先輩は驚いている様子だった。

「少しは期待して付き合つてたのも嘘じやないですけどね。でも、今日の話聞いて確信しました。それに、先輩だけには自己犠牲が強いと言われたくないのです」

俺がそう言つと、先輩は笑つた。

「オレはそういうのじゃないよ。ただ、瑞穂がいつ帰つて来てもいいようにしたかっただけ。まあ、それで選べなかつたのがダメなんだけどな」

「だから先輩に言われたくないんですってばー」

そんなやり取りをしていたら、玄関のチャイムが鳴り響いた。

「でも、一番自己犠牲が強かつたのは多分……」

俺がそう呟くと、先輩も頷きながら玄関のドアを開けに行つた。

しばらくして、室内にみなこちゃんが入ってきた。

「俊也くん、いきなり出て行くからびっくりしたよ。それに、なんで生人くんちにいるの？」

その質問に俺は短くしか答えなかつた。

「瑞穂さんが出で行つたんだ」

「えつ~..」

みなこちゃんさんはやう声を漏らしだが、俺の口から瑞穂さんの名前が
出た事で、どうこうことになつていてるか察したようだつた。

「みなこちゃん、みなこちゃんにとつて？本当に好き？って思える
人は誰かな？」

俺が突然脈絡もなくそう聞くと、みなこちゃんは驚いた様子だつた。

「え、そんなの決まつてるじゃない……」

みなこちゃんは怯えたような表情をしてゐる。

「本当？ じゃあ、誰？」

「それは……」

いつもと違つて俺が強い口調でそつ問に質すこと、みなこちゃん
は戸惑つてゐるようだつた。

「俺は、分かってるよ」

みなこちやんは黙り、田で俺と佐藤先輩を見た。少しの間の後、俺らが何も言わなことじやつとみなこちやんは口を開いた。

「……高校生の頃からずっと、生くんのことが好きだった。でも、瑞穂ちゃんから生くんと暮らしてることって聞いて、諦めうと思つた。けど、畠井されてやつぱつ好きで……でも、この部屋に来た時、ここから瑞穂ちゃんを追い出しきつたんだなあと想つて、耐えられなくて」

「じゃあ、俺と付き合つたのは?..」

そう聞くと、みなこちやんは俺の方を向いた。

「それは、うちのお店に瑞穂ちゃんが来て、『どうこうこと?..』って聞いたら、『今、シユンの家で暮らしてる』って言つから……。私が生人くんから離れたのに戻れないでいるのなら、私と俊也くんが付き合えば瑞穂ちゃんも上手くいくんじゃないか、って」「どうしてそこまでして?..?」

俺がそう聞くと、みなこちやんは必死に訴えかけるような目をした。

「私つて、いつも誰にだつて愛想良くなきや、嫌われそうで怖いと思ってたんだ。」

そんな私にとって、一人でいても自分らしくいられる瑞穂ちゃんはずつと憧れだつた。

だから、瑞穂ちゃんのこと、すこく好きだつたからどうとも幸せ

になつて欲しくて！

そりやあ、俊也くんには悪いことしたって思つてゐるけど……」

みなこちゃんは段々と下を向き、最後は涙声だつた。

すると、今度は佐藤先輩が口を開いた。

「それは、オレの意思とか全然踏まえられていないよな
みなこちゃんは顔を上げる。

俺から見ても目に涙を溜めているのが分かつたが、それを堪えるか
のように強い口調で先輩に向かつた。

「だつて、前に生くんが私のこと好きつて言つてくれたけど……
そんなの、信じられるわけないじやない！」

みなこちゃんはそういつつ、先輩の部屋の中でも食器棚がある方に
視線を移した。

佐藤先輩はそれを見計らつて食器棚の方に向かい、あのペアのマグ
カップを取り出した。

そして、一つのマグカップを床に叩き付けた。

「えつ……」

割れた音が部屋で響く。
だが放心している俺とみなこちゃんをよそに、佐藤先輩はまっすぐ
とみなこちゃんを見た。

「オレが好きなのは、お前だ。美奈子」

みなこちゃんはそう聞いて、ただ泣くばかりだった。
そんなみなこちゃんをゆっくりと、まるで割れないように毛布で包
む込むかのように先輩は抱き締める。

一人の姿を見届けて、部屋を出て行こうとした。
そんな俺に先輩が気付き、みなこちゃんを抱き締めていた腕の力を
解いた。

「中井。 ありがとな」

そう言った佐藤先輩は、真正面から俺のことを見てくれていた。
そして先輩の緩めた腕の中でみなこちゃんが俺の方を向くと、何か
に気付いた様子で慌ててスカートのポケットに手を入れていた。

「俊也くん、これ……出る時かけてきたから」

俺に向かつて、みなこちゃんは手を伸ばしてくる。
受け取ったそれは、新聞受けに入っていたあの封筒の中にあつた鍵
だった。

急いで玄関で落としたままだつた。

「俊也クンの優しさにずっと甘えてごめん。でも、瑞穂ちゃんを
よろしくね

みなこちゃんは涙声だつたけど、それは嬉し涙のように見える。
それにずっと思い悩んでいたことから解放されたのもあって、少し
ぎこちないが晴れ晴れとした笑顔を見せてくれていた。

俺は受け取った鍵をポケットに入れ、「うん。ありがとう」と返し
た後に部屋を出た。

それから、瑞穂さんに何度もかけたが電話に出なかつた。
再び探す宛もなく寒空の下を走つてゐたが、あることに気付いて足
を止めた。

「こんなに走つても、背中が汗を全然かいていない。
元々、俺は汗つかきではなかつたのだ。
ではどうして、引っ越ししてから汗がひどかつたのか……今では分か
る。

「瑞穂さん……」

眠れない夜は先輩の布団に潜り込んでいたという瑞穂さん。
ずっと俺の背中で泣いていたのに、俺は全然そんな瑞穂さんに気付
けずにいてしまつた。

一刻も早く、瑞穂さんを見付けたい。

その時、一人の名前が思い浮かんだ。

「大越……！」

大越なら瑞穂さんの居場所について、何か知つてゐるかもしない。

そう思つて、俺は大越に連絡した。

第九章

「ねえ、教えて。生人にとって、あたしは何だった？」

ベンチに座つて回想していると、生人から電話がかかってきた。その際、瑞穂はずつと聞けなかつたことを尋ねた。

「一緒に暮らしてちつとも苦痛じやなかつた。だから理想の結婚相手だつたけど、好きとかとは違つた」

生人は決して嘘を吐かない。

だから、たとえ今までどんなに思わせぶりな態度を取られていても、それは生人にとって？恋愛？とは違う。それが真実だつた。

「じゃあ今度こそ、好きになれる人を幸せにしなよ

だから、？友達？として言えることなんて、たつた一つしかなかつた。

そんなこと、分かつていた。

なのに、胸が苦しい。自分にはもう、誰もいないのだ。誰も自分を幸せにはしてくれない。

電話先からシヨンの声が聞こえる。

だけどもうシヨンに会わす顔どころか声さえも用意出来ず、電話を切つた。

今はもう、いつもの能天気な姿にはなれなかつた。ベンチの上で膝

を抱え込む。

この季節ならではの冷たい風が、服の隙間を狙つて体に当たる。しばらくして、瑞穂は立ち上がった。

ここでは泣けない。

途中、駅のロッカーに寄つてキャリーケースを取り出し、電車の扉に寄りかかつて揺れを直に感じていると、コートのポケットの中にあつた携帯のバイブ音に気付かなかつた。

中成大学・明王大学駅で降り、明王大近くの九階建てのマンションに着いたのは夕方近くだつた。

ここは最上階に大越の住居がある。

「どうしたんですか、また。しかも今日は大荷物で」

部屋に入る際にそつは言われたが、それ以上は聞かれなかつた。店で出会つて以来、シユンのバイトがある日は終電の時間まで瑞穂は大越の家にいるようになつた。

そのうち、シユンと大越がバイトで組む時は店にしばしば遊びに行つた。

夜、一人で眠れなかつたから。

部屋の中は薄暗かつたが、テーブルランプの灯が室内を橙色に染めていた。

このくらいの明るさが瑞穂にとつても丁度良かつた。大越の部屋はいつも来ても落ち着いた。

大越はキッチンでお茶の支度をしているようだつたがシユンと違い、大越は必要以上に話し掛けでこない。

それもあつてか、シユンの前ではどうしても見せられないもう一人の自分も、大越の前ではいつの間にか自然と出せた。

だから、ここでは気を張らなくていいこと知っていた。
慣れ親しんだソファに深く寄り掛かると、白い布地に包まれた。

瑞穂は再び深く息を吸うと、この半年間を思い返した。

* * *

「あーもう、泊まれるならどこでも行つてやるわよー。」

あの日生人から住所を受け取り、自暴自棄な思いで瑞穂はシユンの家に押し掛けた。

そしてシユンの前でその暴君さを最大限に発揮した。

瑞穂が無理矢理布団を奪つた後で少しだけ目を開けていると、シユンは少し離れた隣に新しい布団を敷き始めていた。

そして電気が消されると、横で大きく寝返りを打つ音が何度も聞こえた。

その間、瑞穂はずつと身構えていた。いつ男が来てもいいように

瑞穂にとって、いつだってそれは緊張の時間だった。

だが朝方近くなつて、隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。

瑞穂は驚くしかなかつた。

何人の男の家を行き来したが、何もしてこなかつたのは今までに生人しかいなかつた。

寝ているのを確認してシユンの布団の中に潜り込んだ。

瑞穂に背を向けて寝ていたシユンの背中に顔をうずめたが、眠りが深いシユンは起きなかつた。

その温もりが裏切らないことが分かると、やつと涙が出た。

瑞穂は昔から、上手く泣けない子供だった。

義理の兄を含め、生人以外の男は瑞穂の体を目的に近寄つてき

た。父に関しては、近寄つてさえ来なかつた。

事の最中に瑞穂がいくら泣いても、男たちはそんなことを気にする訳なんかない。

そんな自分の存在意義は体を許すことだけで達成されていたが、そのような用途でも必要とされていたかつた。

だけビシュンは、翌朝にはつきつと言つた。

『俺、絶対そういうことしませんからー』

それは、体以外で求められなくてはこの家にはいられないようになつた。

だが、自分の容姿や性格が他人より劣つてゐることは瑞穂も分かっていた。

だからシユンと過ごす時間が増えるにつれ、どうしたらずつとこの家にいられるか不安になり、夜になるとその不安は瑞穂に忍び寄つた。

いつもは生意氣なことしか言えないのに、寝てゐる間にそつとシュンの背中で泣いた。

バイトがある日はシユンが帰つてくるまでずっと起きて待つた。そして熟睡していると思わせてシユンが眠つた後に隣で少し眠り、シユンが起きる前に自分の布団に戻る日々だつた。

生人の生活はいつ幸せが壊れるか怖かつた。

一方でシユンは段々と、自分との生活を楽しんでくれていたのがなんとなく分かつた。

じやれ合いも多かつた。

ささやかな触れ合いのほか、本を読みながら背中に寄りかかつても、シユンは嫌な顔ひとつしなかつた。

けれど、シユンの隣で酒を大量に飲んで酔っ払つても、シユンは生人と同じで決して瑞穂に手を出さなかつた。

それがまた、不安で仕方なかつた。

だから自分から行くよりも、抱かれる方がまだ楽だつた。抱いて欲しかつた。

一方で生人とはあまり会えていなかつたし、美奈子のことは何だか気まずくて自然と遠ざけてしまつていた。

シユンと大越から話を聞くことはあつたが、九月の末にシユンのバイト先のコンビニで生人と美奈子の二人と偶然顔を合わせてしまつたことがあつた。

久々に見た二人が楽しそうに笑つてゐる姿を店の外から見ると、やつぱり辛い。

そして、その翌日。晃文堂書店に客として美奈子が訪れた。だが去り際に聞かされたのは思つてもいゝ言葉だつた。

「私、生人くんと付き合つてないからね」

レジを隔てて聞き返す間もなく去つていく美奈子の言葉に、瑞穂は驚かされた。

それでも、一度離れてみると心の整理もつき、生人がどんなに自分に優しくても、美奈子への接し方とは全く違うものだと分かつた。だけど美奈子にそう伝えるのも何だか悔しくて、ずっと言えずにいた。

だがしばらく経つて、シユンが浮き足立つて帰つてきた。

疑問に思つたが、シユンがバイトの間に大越の家に遊びに行つた際、事の顛末を聞かされた。

美奈子の真意は分からなかつたが、それでも？クリスマスを瑞穂さ

んと過ぐす？といつまひに聞こえたショーンの言葉を信じたい自分がいた。

だからショーンには何も言わなかった。

しかし結局、その日は訪れてしまった。

「あのですねー、来週の木曜、午後からでいいんで家空けてくれませんかねー？」

その日もシユンは帰りが遅かった。

少しは覚悟もしていたつもりだったが、返す言葉が見付からない。丁度口の中にカレーが残っていたからって、返事が詰まっているのをシユンは気付いていない様子だった。

「いいよ」

瑞穂が今返せる言葉はそれしかなかつた。

まだ寝る時間じゃない。素直になるためには、温もりが欲しかつた。結局、いつだつてシユンが気付かないようにしか涙を流せなかつた。

そして今朝。シユンが浮かれながらも家を出た後と、瑞穂は起き上がつた。

元々意識はあつたのだが、シユンが出掛けるのを待つていたのだった。

立ち上がりて部屋を見回す。

本人は掃除したつもりであつたようだが、室内には櫛や鏡にドライヤーがあり、畳んではあつてもキャラクター物のタオルが置かれたままになっている。

棚に置かれた瑞穂の酒瓶も隠されていない。一応確認したが、洗面台の歯ブラシも一本のままだ。

お風呂にはシャンプーやリンスも、シユンのとは別に瑞穂のが置か

れている。

「ほんに酒あつたら普通引くし、いくら部屋が片付いていても、こんなんじや気付くに決まってるわ！ 大体、『来週の木曜』って言えば誤魔化せると思つなよー！ 世間様はその田、イブだつづの！ 女なめんな」

苛立ちのあまり一人でそう呟くと、一つ一つキャリーケースに私物をしまつていく。

けれどここに来た時よりも増えていて、どう考へてもキャリーケース一つには入りきらなかつた。

半年という時間を感じる。

ここは、居心地がとても良かつた。けれども。

「もう、居られるわけないじゃない」

まだだ。同じ事が再び起きている。だが考へても仕方なかつた。紙袋に入れて持つて行こうかと一瞬迷つたが、青い燃えないゴミ袋を広げ、また買い直せるものを次から次に突つ込む。最後に、夏に買ったあの浮き輪たちもゴミ袋に入れた。

「だつて、必要ないもの」

そう自分に言い聞かせる。

『また来年』が訪れないことを、シュンと違つて瑞穂は既に分かっていた。

というか、気付かれないと考へているシュンがおかしい。

クリスマスイブだつて、ずっと楽しみにしていたの。シュンの誕生日にケーキの写真が撮れず落胆していたら、『またクリスマスの時に食べるんですから』とシュンは言った。

それから瑞穂は『シュンとクリスマスも過ごせるんだ』と、ずっと楽しみにしていた。

だが、当人はそのことも忘れて今頃彼女とデートだ。

そして家を出る際にゴミを一通りまとめて玄関に置き、キャリーケースを持ってドアを閉めた。
鍵をかけた後、昨日眠れなくてルーズリーフに書いたメモをポケットから出す。

シュンに自分の想いなんて、伝わらなくていいと思っていた。

だけど、何にも伝えないまま去るのはなんだかやっぱり悔しかった。
だからあんな詩のような文章を置いていった。

そしてそのメモと一緒に合鍵を封筒に入れ、新聞受けに入れた。
約束だと思っていたクリスマスイブに、帰れる家を瑞穂は失った。

*

*

*

「ムカつく……」

そう言葉に漏らした時、ティーポットとカップを用意した大越が瑞穂の隣に座った。

空は暮れかかっていて、遠くに見える山の上で観覧車が光り出している。

ここに来ると、よくあの観覧車の光の模様を見ていた。

次々と模様が変わる。

「そういうえば、今日はクリスマスイブですね。今から何かケーキ買って来ましょうか？」

気分を晴らすべく大越はお茶を入れながら話しかけたが、瑞穂は窓の向こうを見続けたままだった。

「どうしたんですか、瑞穂さん。もしかして、中井くんの家を出てきたんですか？」

「そうよ。あんなとこ、出てきたわ」

振り返った瑞穂は吹っ切った様子で言ったが、大越は不思議そうだった。

今日が瑞穂にとってどんな日か、大越は知っている。

「どうしてですか、だつて今日は」「知らない」

そうは言つたが、こんな日にわざわざシユンの家を出て行く必要までは本当はなかつた。

シユンは『出て行け』なんて一言も言わなかつた。……あいつみたいに。

生人との電話で、瑞穂はつい『好きにしていい』と言つてしまつた。生人の言葉は正直突き刺さつたが、それでも今は段々と、次会えた時には？友達？と言える気がした。

野良猫がどんなに可哀想でも、飼うことが出来ないなら餌を与えてはならなかつた。多くの人が分かつてることを、生人は知らなかつただけ。

だが、帰る場所を完全に失つて困るのは自分だと一番分かっているはずなのに、どうして生人だけでなくシユンの家まで出て行つてしまつたのだろう。

横には大越がいる。自分の中ではその疑問は收まりきらなくて、瑞穂はゆっくりと今思つていてることや現状を大越に話した。

「では、どうして瑞穂さんは出て行つてしまつたのでしょうか？」

自分で起きた疑問をもう一度大越の口から聞かれると、今度はさつきとは違つてゆっくりと言葉を探すことが出来た。

「……怖い。けど、それ以上は分からない」

他には何も言えなかつた。

言葉を迷つていると、大越がふと立ち上がつた。

そして、瑞穂を後ろからそつと抱き締める。

「ここなら、部屋もあります。

それに僕なら瑞穂さんのそばにいます。

僕は、瑞穂さんのことがずっと好きです」

大越から急にそう言われ、瑞穂は戸惑いながらも振り返る。顔が向かい合いつと、瑞穂を捕らえていた腕を大越はゆっくりと離した。

「けれど、それでも瑞穂さんは、中井くんを信じたいから怖がっているのでしょうか。答えはもう出しているじゃないですか」

その言葉の意味を、ゆっくりと考へる。そして。

「……裏切られるのが、怖かったのだと思つ」

半年暮らして、ショーンの家は瑞穂にとっても「家」と呼べる場所になっていた。

だから、失うのが怖かった。

『出て行け』と言われるくらいなら、自分から出て行つた方が傷付かないように思えた。

けれど。

「Uのままで、いいのかな」

ずっと、逃げたままだつた。

特定の男を作らずに、夜が過ごせれば誰でも良かつた。生人の家を出た時さえも。

大越の想いは率直に嬉しかつた。

いつもの瑞穂だったら、喜んでこの家に留まるだろ?つ。

大越なら進んで受け入れてくれるのは分かつていてる。

だけど今は、ショーンに選ばれたい。

たとえ迎えになんて来ないと、分かっていても。

「じめん。あたし、行くね」

キャリーケースを引きずつて瑞穂が出て行くのを、大越は見送った。

*

*

*

大越に電話をかけると「とりあえず家に来てください」と住所を言われ、大越の家に初めて行った。日は暮れていたがその闇の中にそびえ立つ高層マンションの、それも最上階に住んでいるなんて知らず、この時初めて大越が本物のボンボンだったことを知った。

「瑞穂さんがどこにいるか知らないか？！」

ホールにあるインターフォンに大越が出ると、焦りのあまりいきなりそう聞いてしまった。

「中井くん。ずっと待っていました。とりあえず中へ」

大越は質問に答えず、オートロックのドアを開けて中に招いた。エレベーターで昇り、再びインターフォンを押して部屋に入る。室内は全体的に一世帯が暮らしても十分な広さだった。リビングには白い大きなL字型ソファがあり、とりあえず座ると大越も俺の向かいに座った。

「さつきの質問ですが、先程まで瑞穂さんはここにいました」「どういうことだ？！」

俺の反応に臆する事もなく、大越は続けた。

「瑞穂さんがどこに行つたのか、心当たりがあります。ですが、中

井くん

大越はそう言つと息を吸い込み、今まで見た事のないような怒りを露にした。

「瑞穂さんが今まで、どれほど苦しんでいたと思うんですか？！今日のことだつて、どれだけ楽しみにしていたか……僕じゃ、ダメなんですよ……」

最後の方の大越は泣きたくても泣けない、辛い表情をしていた。

「中井くんがみんなこちやんのことを想つているのは分かつています。でも」「みんなこちやんとはもう、何もないんだ。それに、分かつたから。大越」

落ち着きながら俺が言つと、大越は驚いたようにこちらを見てきた。

「今まで気付けなくて悪かった。詳しくは後で話す。だけど、頼む。瑞穂さんがないところを教えてくれ」

俺の顔を大越は黙つて見ていたが、立ち上がり外を見た。東側の壁一面が窓になつていて大学や街の光が輝く中、山の上に観覧車が見える。

「瑞穂さんは多分、玉那ランドに向かつたと思います。ここからよくあの観覧車を見ていましたし、それに」

俺が一度も瑞穂さんの口から聞いたこともない話を大越はする。いや、今日聞いた事はどれも、自分が？知らうとしなかつた？話だ

つた。

「そつか、だから花火大会で……分かつた。行つてくる」

部屋を出て行こうとする、「中井くん！」と大越が叫んだ。

「瑞穂さんを、頼みましたよ！ 僕がなんで引き止めなかつたか、分かつますよね？！」

その口調から、大越はもしかして瑞穂さんに本気だったのかもしれないと俺は感じた。

「ああ、必ず連れ戻す！」

俺はそう言つて、瑞穂さんの元へ向かつ。

最終章

昼間から白く鈍よりとした雲が街中を覆っていたが、夜が深まるについに雪が舞い降りた。

そんな中、クリスマスイブのもあつて、玉那ランドは夜間営業をしていた。

地方によくある小さな遊園地だったが、家族連れやカップルで、ひつ返している。

その人ごみをかき分け、花火大会の場所とは逆方向にある観覧車に向けて急ぐ。

ゆっくりと空を漂う雪で視界を奪われたが、シウンはその足を止めなかつた。

そして坂道を駆け上がりつゝ頂上に辿り着いた時、観覧車乗り場の前にはキャリーケースを引いた瑞穂がいた。

傘を差さずにいたのもあって、黒のコートには既に白い雪が積もり始めている。

舞い落ちる雪の合間から、ゆっくりと動き続ける観覧車が見えた。

瑞穂は立ち止まって、観覧車の一一番てっぺんを見上げていた。

この街を見下ろすように観覧車は高台に立つていて、街の至る所からその姿を見ることが出来た。

この観覧車を見る度に瑞穂は思いを寄せていた。

だがこの場所に一人で立つのは気が引けて、ずっと出来ずについた。

ここに来ると、どうしても思い出してしまう記憶がある。

それはどんなに願つても、もう一度と手に入らない日々だった。その幸福に手を伸ばせないと考えると、心が締め付けられる思いがする。

もう隠げになってしまった記憶。

けれども、その記憶を消したくはなかった。

だから考えないようにしていた。

幼かつた瑞穂が幸せを感じた、たった一つの思い出。

そして今も、幸せだった日々を再び失おうとしている。どちらも、もう戻れない日々であるとは分かっていた。けれど、どうしても待ちたかった。この場所で。

振り続ける雪に歓声をあげながら、瑞穂の横を女の子が通り過ぎる。三十代後半そうな男女が並び、母らしき人が前を歩く子供に「滑らないようにね」と後ろから言葉をかけていた。三人は駅の方に向かって歩いていく。
もう閉園時間だった。

帰る場所なんて、あたしにはもうないんだ。

瑞穂がそう思い、薄く白に染まり始めた地面に視線を移した時だつた。

「瑞穂さんー！」

雪が降り続ぐ中、シユンは入ごみをかき分けて瑞穂に駆け寄る。

「シユン？ー ジリして……？」

顔を上げ振り返った瑞穂は、来るはずもないと思っていたシユンが田の前にいることに驚きを隠せない様子だった。だが、すぐにいつものように明るい顔を作った。

「あー！ あんた今日『ホールード』じゃん！ もしかして場所被つたとか？ 『Jめーん』」

茶化す言葉をよそに、シユンは一歩ずつ確實に瑞穂に歩み寄る。

「瑞穂さんが小さい時にお父さんと、本当のお母さんと、この観覧車に乗つたことがあるやつですね」

父と母があたしと並んで手を繋ぎ、観覧車に向かつ姿。メリー・ゴーランド。花火大会。その手のひらのぬくもり。すべて、まだ家族が壊れていなかつた頃の……。

「…………なんで……なんで、知つてゐるの？」

瑞穂の表情は一気に強張る。

瑞穂にとつて、それはシユンに言つた覚えもないことだった。いや、シユンが知るはずもないことだと思つていた。

一方で、こんな瑞穂をシユンが見たのは、あの美奈子との一件以来だった。

あの時は、目の前で怯えている瑞穂と向き合おうとしなかった。だが、今のシユンは違う。

「お母さんと、家族で過ごした唯一の思い出だつて……全部、聞きました。俺、瑞穂さんの近くにいると思つて、本当は全然知らなかつた。いや、今まで瑞穂さんのこと、知りうつしなかつた」

驚いて言葉にならない表情のまま、瑞穂は黙つてシユンを見ている。以前、大越と三人でここに来ることになった時、気が重なかつたのは昔の思い出のことがあった。

ずっと遠ざけていて行けなかつた場所。

だけど、閉園と知つて最後の花火大会を見たくて、勇気を出してあの時見に行つたのだつた。

けれどまさか、シユンに知られては瑞穂は思いもしなかつた。シユンはまた一步瑞穂に向かつて踏み出す。一人は間近で見つめ合う形になつた。

「閉園する前に、もう一度ゆっくり来ましょう。とつあえず、今は」

シユンは手を伸ばし、もう少しにも行かないように瑞穂の腕を掴む。そしてもう一方の手をポケットに入れ、それをぎゅっと握つて出す。

「うちに、帰りましょう」

シユンがポケットから出したのは、瑞穂が朝出て行く時に封筒に入れたあの合鍵だった。

そして有無を言わさずに瑞穂に鍵を握らせると、シユンはその空い

た手でキャリーケースの取つ手を掴んで持ち上げた。

「えっ、なんで？ どうして？」

いつもの構図とは逆に、瑞穂一人が焦っている格好となつた。だがその腕を決して離さず、シユンはキャリーケースを持ちながら瑞穂を連れていく。

腕にかかる力は、いつものシユンとは思えないくらい強かつた。

「どうしても、です。瑞穂さんがい生活なんて、俺には有り得ませんから」

歩きながらシユンが言つと、瑞穂は最初驚いた様子だつた。だが、言葉の意味を少しずつ察すると、口元に笑みを浮かばせた。そのまま自然と涙が込み上げてくる。もう隠さなくて良かつた。そして瑞穂は手を引かれたまま、シユンの後ろを歩いていく。降り続く雪で、後ろには一人分の足跡が出来ていた。

その後、瑞穂はキャリーケースを持たなくなつたが、ここから先はまた別の話。

あとがき【読まなくても、作品の展開に支障はありません。】

「伝えたいことがあるなら作品内で書け。後書きに書いても、そんなのは言い訳で見苦しい」

大学の文芸部はそんな感じで、作品を載せていても後書きを書く機会はなかつたのですが連載が終わつたこともあります、ほんのちょこつとだけ書きたいと思います。

自己満ですので読み飛ばしても支障はありません。

まずは、恐らく殆どの方が初めまして。

瀬戸真朝と申します。ただのしがない女子大学生です。

「小説家になろう」にこの作品を掲載したのは2010年11月～11年1月にかけてですが、私が所属する文芸部の部誌に掲載したのは09年11月～10年2月です。

まさに丁度一年前。ちなみに電撃に投稿するために加筆修正して出したのが10年4月という。

小説家になろうで発表したこの『キャリーケースの女』は通算三度目の書き直し版です。

更に言つと、08年の初夏あたりにはこの作品の原型をネットに載せていました。

その時書いたものには、瑞穂が作るあの「黒ずくめの料理たち」が出来上がるまでの詳細や、シュンと大越の大学生活も書かれています。何より一番異なるのは、瑞穂と生人が同級生であることをシ

ユンが知らされる場面が序盤にあることですが。

でも展開は今回掲載しているバージョンと全く一緒になる予定でした。受験勉強に負けて途中で執筆を投げ出しましたが。

08年の春には既に頭の中に構想はあったことを考へると、瑞穂さんやシユンとはかれこれもう三年近くの付き合いなのですね。

そう思ふと、難産ではありましたがとても思い入れのある作品です。

この作品で特に重視したのは

「ライトノベルしか読まない読層でも読みやすい現代小説にしよう」というものでした。

構想を練り始めた当時、私は根っからの現代小説好きだったのですが、「ライトノベルしか読みたくない」と公言する知人が身近にいて、そういう人にもちょっと暗いけど現代小説だつて面白いのだと思わせたかったのです。

そこで、実は一部と二部の話はそれぞれ別の話として考へていたのですが、一部では?ハイテンションで常識はずれの変な女?として書かれている瑞穂さんの秘密として二部にある設定を付けました。

それによつて、最初はただのラブコメとして軽いノリで読んでもらい、ページを進むにつれて「あれ?……?」と思わせるようなストーリー作りを心がけました。

いきなり不幸な生い立ちを説明されても知らない人の話だと耳に入りにくいですが、『瑞穂さん』という人を読者が知つてからだとそういう展開も受け入れて貰えるかなと。

作者としては、後半は苦い薬を吐き出さないように祈りながら少しずつ量を増やして飲ませ続ける思いで書いていました。

まさに実験的な作品でした。

それも登場人物が五人という多さで、瑞穂・生人・美奈子の三角関

係にシユンと大越が混じるといつ、入り組んだ恋愛模様を書くのも初めてでした。

しかし、ラブコメと見せかけて作者は「これを家族モノだと思つてします。

メディアワークス文庫の創刊を知り、そのコンセプトはまさにこの作品にふさわしいと思つていましたが、残念ながら外部からの評価は散々でした。

部内でも「ライトノベルをどんなものか分かつていない。君には向いていない」と結構叩かれました。周囲からはとても人気がない作品です。

そう言われる度に、瑞穂さんやシユンに「ちゃんと書けなくてごめんね」と心の中で謝っています。

今も、脳内では瑞穂さんとシユンは動き回っています。
あの一階建て木造アパートの一階で、もちろん「き使われているのはシユンですが。

その姿を見ている自分は「一人の関係を『面白い』と思つているのに、それを上手く書くことが出来ていないから評判が悪いのです。

私よりいい書き手の脳内に生まれたら、書かれた二人は作中でももつといきこきとしていたのになと思います。

しかしそまだ諦めてなかつたりします。

大筋は変える気がありませんが、特に評判が悪い導入部分を全面的に変更し、カツプリングも変えつつも『瑞穂とシユンの物語』をまた書きたいと思います。

タイトルもキャリーケースの女ではなく、別作品として発表する予定です。

そこで、出来が悪い作品ではあります、感想や指摘など簡単にで

もお寄せ頂けると幸いです。今後に生かしたいと思います。

ちなみに、五人いる中で作者としては生人が一番タイプだつたりします（笑）

この作品を読んだ方からは『感情移入できるキャラがない』と嘆かれていますが、それに関しては第三者的視点で見て頂ければと。

『大越が一番好き』『大越がかわいそう』とはよく言われます（笑）が、大越は最初から脇役と考えていたので仕方ありません
部誌用に書き始めた最初、大越をリストラしようとしてましたからね、私。

読んだ人からそれはまずいと何度もこまれたことか。

けれども、新作では大越は結構重要キャラになるかもです。

最後に……ここまで読んでくれる方がいるのか分かりませんが、『
キャリーケースの女』をお読み頂きありがとうございました。

人気もない作品なので可能性は低いですが、要望があれば（なくて
も）番外編を書くかもです。

10章の後、遊園地に行つた瑞穂とショーンの様子とか。

『キャリーケースの女』というタイトルに疑問を覚える方も多いの
ですが、そもそもこのタイトルから今の現状の危機感を持つて欲し
かつたのでした。

ネカフエ難民なんて言葉もある世の中ですが、多くの人が当たり前に持つていて心休まる場所であるはずの『家』 さえない人がいることを少し考えて欲しかつたのです。

けれどそんな世の中で、最終的に瑞穂さんは安心出来る『家』をショーンと一緒に手に入れることが出来て良かつたと作者は常々思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599o/>

キャリーケースの女

2011年11月10日23時21分発行